

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第86集

東原ノ坪遺跡

平成7年度静岡県立大学教職員住宅建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1997

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第86集

東原ノ坪遺跡

平成7年度静岡県立大学教職員住宅建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1997

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

東原ノ坪遺跡の埋蔵文化財発掘調査は、静岡県立大学教職員住宅建設に伴うもので、平成6年5月に県教育委員会文化課の確認調査により、弥生時代～古墳時代の集落跡であるとの報告に基づき、平成7年12月～平成8年3月まで本調査を実施したものである。

今回の調査では、集落跡と考えられる溝や小穴（柱穴）が確認され、その溝の中から弥生時代後期から古墳時代前期に静清地区で広く見られる土器が、少量ではあるが、出土した。

当研究所としては、初めての静清地区での丘陵地における発掘調査であったが、有度丘陵北麓での今後の調査にとって重要な資料が提供できた調査であったと考えられる。また、静清地区で多く実施された低湿地の調査や古墳の調査を踏まえながら、当地区的丘陵地における弥生時代から古墳時代の集落跡の調査が、今後の課題となろう。

調査の実施及び本書の刊行にあたっては、深いご理解とご協力をいただいた県企画部学術・大学課、県教育委員会文化課を始めとする関係各位並びに調査を暖かく見守っていた地元の皆様に心から感謝と敬意を表したい。また、厳寒の中を発掘調査に参加された方々、並びに整理作業に携わった方々の一方ならぬ労苦をねぎらいたい。

平成9年3月

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤忠

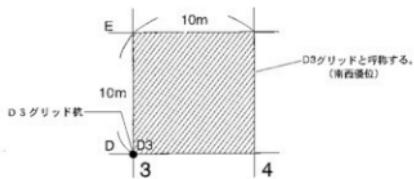
例　　言

1. 本書は静岡県静岡市国吉田地区に所在する東原ノ坪遺跡の調査報告書である。
2. 調査は「静岡県立大学教職員住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査業務」として、静岡県企画部・学術大学課の委託を受け、静岡県教育委員会の指導の下、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
3. 現地発掘調査は平成7年12月1日～平成8年3月31日まで行った。整理作業は、現地発掘調査と並行して基礎的作業を行い、平成9年3月で完了した。
4. 調査体制は下記の通りである。
現地調査
平成7年度 所長 斎藤 忠、副所長 池谷和三、常務理事 三村田昌昭
　　調査研究部長 小崎章男、調査研究四課長 橋本敬之、調査研究員 小澤敦夫
整理報告
平成8年度 所長 斎藤 忠、副所長 池谷和三、常務理事 三村田昌昭
　　調査研究部長 石垣英夫、調査研究部次長兼一課長 栗野克巳、調査研究員 小澤敦夫
5. 本書の遺物写真撮影は当研究所技術職員杉山すず代が、また、X線撮影は主任調査研究員西尾太加二が行った。
6. 本書の作成は、調査研究部次長兼一課長 栗野克巳、調査研究員 小澤敦夫、技術職員 落合高志、技術補助員 河西淑乃が行った。執筆分担は下記の通りである。
第1章～第5章第1節・第6章……………小澤敦夫
第5章第2節……………落合高志
7. 遺跡の地質・地形等については、加藤芳朗氏（静岡大学名誉教授）に御教示をいただき、御所見を特論として掲載した。
8. 備古環境研究所に自然科学分析（テフラ分析）を依託し、その結果報告を掲載した。
9. 本書の編集は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が当たった。
10. 発掘調査資料は、全て財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が保管している。

凡　　例

本書の記述については、以下の基準に従い、統一をはかった。

1. 調査区の座標軸は、平面直角座標VIII系を用いた。
2. 本書で使用した方位は座標系の方位（座標北）である。
3. 1辺10m方眼のグリッド配置は、調査区南端にある $X = -12,330$ m軸を調査区南北軸のAとした。
また、調査区南西端から約3mにある $Y = -5,230$ m軸を調査区東西軸の1とした。
4. 南北軸はアルファベット（A～F）、東西軸は通し番号（1～5）を用いた。
5. グリッド杭とグリッドのそれぞれの名称については下記のように設定した。



6. 遺構・遺物の標記は次の通りである。

| 遺構(S) | | 遺物 |
|---------|---------|--------|
| D 溝 | P 小穴・柱穴 | P 土器 |
| H 掘立柱建物 | X その他 | M 金属製品 |

7. 遺物番号及び遺物の見出番号は、遺構図・遺物実測図・遺物図版についても統一し、共通の番号を付した。

目 次

| | |
|---|----|
| 序 | |
| 例言・凡例 | |
| 第 1 章 はじめに | 1 |
| 第 2 章 調査の経過 | 2 |
| 第 1 節 調査の方法 | 2 |
| 第 2 節 発掘調査の経過 | 2 |
| 第 3 章 位置と環境 | 5 |
| 第 1 節 位置 | 5 |
| 第 2 節 歴史的環境 | 6 |
| 第 4 章 基本層序 | 9 |
| 第 5 章 遺構・遺物の概要 | 11 |
| 第 1 節 遺構 | 11 |
| 1 潟状遺構 | 11 |
| 2 掘立柱建物跡と小穴（柱穴）群 | 19 |
| 3 集石・配石 | 22 |
| 4 土坑または溝 | 23 |
| 5 風倒木痕 | 23 |
| 第 2 節 遺物 | 24 |
| 第 6 章 まとめ | 26 |
| 特論 静岡市東豊田、東原ノ坪遺跡の土層観察所見－加藤芳朗（静岡大学名誉教授）－ | 27 |
| 特稿 静岡県、東原ノ坪遺跡の火山灰分析－古環境研究所－ | 33 |

挿図目次

| | | |
|-------|----------------------------|-------|
| 第1図 | 調査区グリッド配置図 | 2 |
| 第2図 | 作業状況 | 3・4 |
| 第3図 | 遺跡周辺地形図 | 5 |
| 第4図 | 周辺遺跡分布図 | 6 |
| 第5-1図 | 土層柱状図 | 9 |
| 第5-2図 | 標準土層図 | 10 |
| 第6図 | IV層上面全体図 | 12 |
| 第7図 | 浅礫部全体図 | 13 |
| 第8図 | 土層図(1) | 14 |
| 第9図 | 土層図(2) | 15・16 |
| 第10図 | S D 21 実測図 | 17 |
| 第11図 | S D 21 土器出土状況図 | 18 |
| 第12図 | 掘立柱建物群全体図 | 20 |
| 第13図 | 掘立柱建物跡 S H 45・46 実測図 | 21 |
| 第14図 | 配石 S X 42・集石 S X 43・44 実測図 | 22 |
| 第15図 | S X 01 風倒木痕実測図 | 23 |
| 第16図 | 土器拓影・銅錢X線写真 | 25 |
| 第17図 | 有度山西麓の段丘 | 27 |
| 第18図 | 有度山西麓の土層断面図、寺久保断面の火山灰粒子頻度図 | 28 |
| 第19図 | 発掘区の概要 | 29 |
| 第20図 | 土層断面 | 30 |
| 第21図 | 発掘区の浅礫部と段丘上の微高地 | 31 |
| 第22図 | 遺跡の位置 | 33 |
| 第23図 | 火山灰分析試料採取地点平面図 | 34 |
| 第24図 | A・B・C地点の土層柱状図 | 35 |
| 第25図 | A・B地点の火山ガラス比ダイヤグラム | 36 |

挿表目次

| | | |
|-----|----------------------|----|
| 第1表 | 周辺遺跡地名表 | 7 |
| 第2表 | 小穴観察表 | 19 |
| 第3表 | 東原ノ坪遺跡A地点の火山ガラス比分析結果 | 37 |
| 第4表 | 東原ノ坪遺跡B地点の火山ガラス比分析結果 | 37 |
| 第5表 | 東原ノ坪遺跡C地点のテフラ検出分析結果 | 38 |
| 第6表 | 東原ノ坪遺跡の屈折率測定結果 | 38 |

図版目次

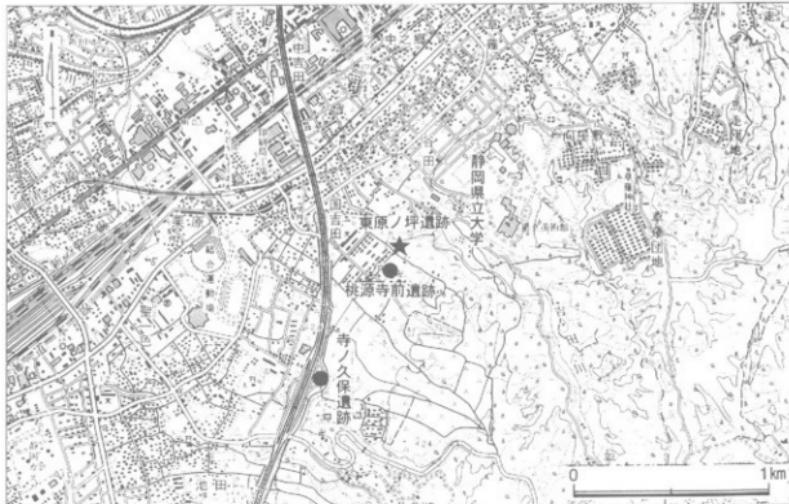
- カラー図版 1 1. IV層上面全景（北東より）
2. IV層上面検出遺構（北西より）
- カラー図版 2 1. 北法面土層堆積状況（第5-1図a地点付近）
2. 北法面SD 21横断面
- 図版 1 1. IV層上面検出遺構（西より）
2. 西法面土層堆積状況（第5-1図d地点付近）とSP 41横断面
- 図版 2 1. 浅縛部横断面（東法面南部）
2. 浅縛部横断面近景（東法面南部）
- 図版 3 1. SD 21・配石SX 42（北東より）
2. SD 21内土器片P 08出土状況
- 図版 4 1. SD 08・SP 03（北西より）
2. SP 15検出状況
3. SP 04~06半裁状況
- 図版 5 1. SP 33半裁状況
2. SP 33完掘状況
3. SP 39+40横断図
- 図版 6 1. 配石SX 42
2. 集石SX 43
- 図版 7 1. 集石SX 44（西より）
2. 集石SX 44解体状況
- 図版 8 1. SD 21出土土器片（外面）
2. SD 21出土土器片（内面）

第1章 はじめに

静岡県立大学は静岡薬科大学（昭和28年開学）、静岡女子大学（昭和42年開学）、静岡女子短期大学（昭和26年開学）を改組・統合し、新たに4学部からなる総合大学として昭和62年に開学した。県の中核的高等教育の場として、県民が大きな期待を寄せる中、大学院研究科の増設をはじめとして、教育機能の拡充を進めてきた。また、平成9年には看護学部、短期大学静岡校も開校を予定している。この動きにともない、教職員住宅の増設が必要となり、キャンパスのある静岡市谷田に隣接する市内国吉田地先に3階建1棟24戸の住宅が建設されることとなった。

住宅建設予定地は西に弥生土器の出土した桃源寺前遺跡、南西約700mには弥生～古墳時代、中世の住居跡等が確認された寺ノ久保遺跡があり、埋蔵文化財包蔵地である可能性が考えられた。こうした状況の中、平成6年5月10日～13日の3日間、静岡県教育委員会文化課により、確認調査が実施された。その結果、建設予定地内から弥生～古墳時代と推定される遺構が確認された。この結果をもとに、県企画部・学術大学課と県教育委員会文化課によって協議がもたれ、現地調査を実施することとなった。調査全般の調整は静岡県教育委員会が、発掘調査は財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が当たることとなった。

平成7年11月17日に発掘調査業務委託契約が締結され、現地調査は平成7年12月～平成8年3月までの4ヵ月間、整理作業は平成8年度の事業となった。11月後半に発掘補助員の募集、発掘資機材の確認等の諸準備を経て12月1日から現地調査を開始した。



第2章 調査の経過

第1節 調査の方法

調査対象区域には、国土地標に合わせて、10 m方眼のグリッドを設定した。各グリッド杭の名称は、南からA・B・C……のアルファベットを、西から1・2・3……の数字を付し、この組み合わせによりA1・B2……のように表記した。グリッドの名称は各グリッドの南北に位置する杭の表記を用いた。

調査は、確認調査時に設定されたトレンチ（第1図）内に遺構が残されているために、この再掘削から始め、改めて本調査のトレンチとして、土層や遺構の観察を始めた。表土除去は建設重機（バックフォー）を使用し、包含層の発掘は手掘りで行った。平均掘削深度が1 m強と浅く、水はけのよい土壤のため、法面は垂直のオープンカット工法とした。南北方向のトレンチには西側に、東西方向のトレンチには北側にそれぞれ、幅約80 cmの土層観察用の帯を残し、遺物はグリッド毎に取り上げた。遺構・遺物の標記は凡例に示した通りである。

平面図及び土層図は縮尺1/20を基本とし、詳細図が必要な場合に縮尺1/16で作成した。写真撮影は6×7寸（モノクロネガ・カラーポジ）と35 mm判（モノクロネガ・カラーポジ）を併用し、作業工程記録用として35 mm判（カラーネガ）を使用した。全景等は、ローリングタワー（2段組）と高所作業車（20 m）を使用して撮影した。

第2節 発掘調査の経過

静岡県教育委員会文化課による平成6年5月の試掘調査では、調査対象面積約1,000 m²の内、約160 m²に確認トレンチが入れられ、遺物は検出できなかったものの、黒色土を覆上とする溝、小穴、集石および配行の各遺構を検出しており、調査区域全域で遺構を確認している。



第1図 調査区グリッド配置図

この結果を受け、平成7年11月27日から準備工に入り、調査区をガードフェンスで囲い、安全対策に努めた。特に、住宅と茶畑が隣接する西側及び谷下に住宅地が密集している北側の周囲には、高さ3mの鋼板による、工事用防護フェンスを単管パイプで組み上げ、土砂の崩落・風塵等の防止を図った。

12月1日から11日まで、調査区の設定、試掘トレーニングの位置の確認と一部の試し掘りを進める一方、排土置き場の設置、発掘補助員の駐車スペースの整備、プレハブの設置、発掘資機材の搬入を行った。

12月12日・13日の2日間でバックフォーによる表土除去を行い、本格的な調査の開始に備えた。

12月14日～20日までは、人力により、トレーニングの掘削を行った。一部に搅乱層があったが、確認調査時に検出された遺構の全てを確認した。この間、トレーニングの土層断面の検討・実測も進めた。

12月21日～27日まで、表土直下の第1遺構面（II層）の平面精査を実施し、遺構の検出に努めたが、



1. 表土除去作業状況



2. SD 21 堀り下げ作業状況



3. 集石SX 44 実測作業状況



4. 加藤議員による現地指導



5. 小学生現地見学



6. 古環境研究所による火山灰分析試料採取
作業状況

第2図

茶の木の耕作・改植による削平が予想以上に広範囲に及んでおり、遺構は確認できなかった。一方、遺物に関しては、II層上面で銭貨（古錢）が一点出土した。

1月8日から2月8日まで下層の調査に取り組んだが、第1遺構面同様、擾拌が多く保存状態のよくない第2遺構面（III層）については掘り下げて、第3遺構面（IV層）の平面精査へと移行した。この作業は第1・2遺構面の遺物の検出も併せて取り組んだ。この結果、IV層上面にて、溝状遺構3本、ピット32カ所、土坑または溝と考えられる遺構1カ所を検出した。また、溝状遺構（SD 21）の覆土中から、8片の土器片が出土した。この間、IV層上面の平面実測および遺構・遺物の検出状況の写真撮影を実施した。

試掘調査の段階で確認された遺構を完掘できたため、2月13日にハイライダーにより遺構全体写真を撮影し調査に一区切りをついた。

2月15日から3月14日まで下層の解体・精査、および土層断面図の実測作業を実施した。基盤層の疊層が凹凸のある波状堆積を示しており、堆積の厚さが調査区内で一定ではなく、疊層が深く、下層（V・VI層）の堆積が認められた地点についてのみ調査したが、遺構・遺物とともに検出することはできなかつた。

この間の2月20日には、加藤芳朗氏（静岡大学名誉教授）に現地の地質・地形等についてご教示を頂いた。

3月15日には、自然科学分析のための試料サンプリングを行ない、現地の撤収作業に着手した。3月21日までに、発掘資機材の撤収を完了し、現場納めを行った。

3月22日から26日にかけて、プレハブ及び付帯設備の解体・撤収作業を行い、27日には現地での調査活動のすべてを終了した。



7. 描図作成



8. 土器拓本作業

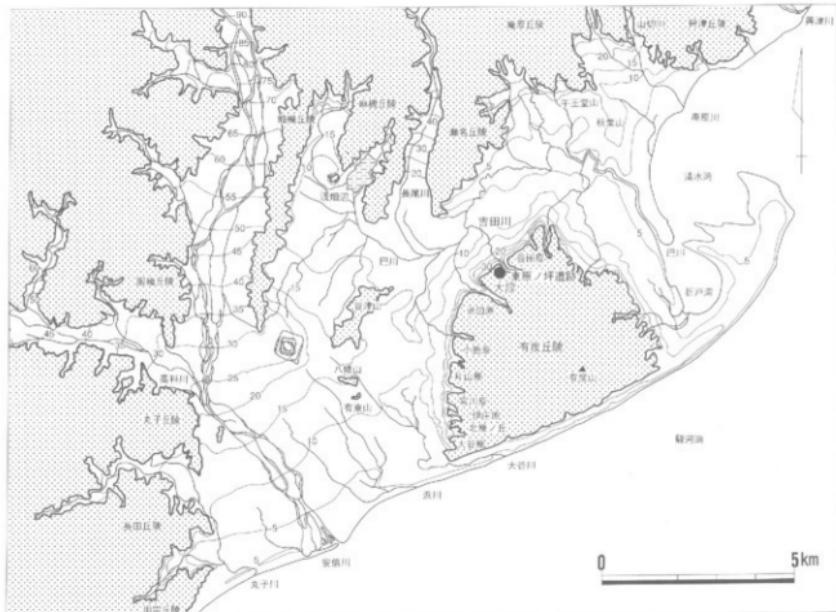
第2図 作業状況

第3章 位置と環境

第1節 位置

東原ノ坪遺跡は、有度丘陵北麓の標高 53 m の段丘の緩斜面上に立地している。有度丘陵は静岡平野の南東部に、今から約 10 万年前、第四紀完新世の初めごろに隆起を開始したとされる丘陵で、現在、最高点の有度山山頂は標高 307 m に達している。丘陵の北および西側が緩やかな傾斜をなして平野に接しているのに対して、東および南側は、海蝕崖が形成され急崖となっている。

有度丘陵の地質は、第四紀更新世の地層からなるが、これは下位より、根古屋泥層、久能山礫層、小鹿礫層、草薙泥層、国吉田礫層の 5 層に区分されている。このうち、根古屋泥層、草薙泥層は、ともに泥層を主体とする海成堆積物からなるが、久能山礫層、小鹿礫層、国吉田礫層は砂礫を主体とする、かつての安倍川の河口部に形成された扇状地性堆積物からなる。これらの地層は、その後の隆起によって、山頂付近を通る北東—南西方向の長軸をもつドーム状背斜構造をなしており、南西麓から北麓にかけていくつかの平坦面が見られる。このうち、山頂部のものは「日本平面」、山麓近くのものは「小鹿面」、また、北麓の小鹿面の裾にみられるものは「国吉田面」とそれぞれよばれている。これらの平坦面はいずれも、第四紀更新世の地層からなるとされるが、小鹿面と日本平面は、ともに、小鹿礫層という地層で構成される同時代の面と考えられており、国吉田面は、これらより一段低く、国吉田礫層という新しい地層で構成される新时期の平坦面とされている。



第3図 遺跡周辺地形図

本遺跡の立地する国吉田面は北～北西に緩やかに傾斜し、安倍川扇状地に接している。南は小鹿面～日本平面に継ぎ、急傾斜地となり、東は吉田川によって開析谷が形成されている。国吉田面は国吉田疊層を基盤層とし、その上に安倍川平野からの砂塵から成る風成の土層堆積物があり、現地表面が構成されている。本遺跡の周辺は、有度山山頂から北西方向に緩やかな傾斜をもつ平坦面であるが、地表面は20～30 m間隔で、浅谷と微高地が繰り返し表れる、ごく浅い凹凸が見られる。

本遺跡の周辺は戦後まで、平野部では吉田川の水に灌漑される水田が、また丘陵部では水はけの良い土壤を活用して茶畠が広がる農村地域であったが、昭和30年代の高度経済成長が始まるとともに、恵まれた交通条件により、宅地化の波が押し寄せた。本遺跡の周辺では現在も茶畠が姿を消し、住宅の建設が続いている。

第2節 歴史的環境

有度丘陵が立地する静清平野では、先土器時代～縄文時代の遺跡は丘陵上に分布しており、有度丘陵では大段I遺跡で旧石器時代のブレードが、奥大谷遺跡で縄文時代前期の土器・黒耀石フレイクが、そして堀ノ内A遺跡と大段II遺跡では縄文時代中期の土器・石器が採集されており、これらの道具を使用して、丘陵の緩斜面を中心に、人々が生活を営んでいたことが確認されている。

静清平野における縄文時代後期から晩期の遺跡は数は少ないが、庵原丘陵、有度丘陵、興津川流域、巴川流域においてその存在が確認されている。そして、この時期の遺跡は丘陵上やその縁辺部に立地している場合が多いが、有度丘陵周辺では清水市天王山遺跡において、縄文時代晩期から弥生時代中期初頭に続く住居跡が検出されている。



第4図 周辺遺跡分布図

第1表 周辺遺跡地名表

| 番号 | 遺跡名 | 時代 | 遺構・遺物 | 番号 | 遺跡名 | 時代 | 遺構・遺物 |
|----|-------------|-------------|--------------------|----|-------------|--------|---------------------|
| 1 | 千代田遺跡 | 弥生(後) | 弥生土器 | 22 | 井手城(大寺弓山)遺跡 | 縄文、弥生 | 住居跡、漆器石斧、鐵文土器 |
| 2 | 愛宕山城 | 中世 | 白輪鏡、土偶、埴輪、瓦段、空器 | 23 | 井手城(吉田古墳群) | 古墳(後) | 横穴式石室、研磨、鐵器器、勾玉 |
| 3 | 長柄山城(長柄郡) | 中世 | -- | 24 | 日吉山古墳 | 古墳 | 横穴式石室、鐵器 |
| 4 | 葛谷山古墳 | 古墳(後) | 人刀、玉鏡、須恵器 | 25 | 上ノ山遺跡 | 縄文～古墳 | 橫穴式石室、陶器 |
| 5 | 若ノ口坪遺跡 | 弥生 | 弥生土器 | 26 | 上ノ山古墳群 | 古墳(後) | 横穴式石室、大刀、小刀、鐵器器 |
| 6 | 道下遺跡 | 弥生 | 弥生土器、鐵石斧 | 27 | 東人谷古墳群 | 古墳(後) | 横穴式石室、須恵器、大刀、玉 |
| 7 | 御原遺跡 | 弥生 | 弥生土器 | 28 | 丸山城(丸山寺城) | 中世 | 土器、井戸、鐵器、鐵門 |
| 8 | 御原(前)遺跡 | 弥生(後) | 弥生土器 | 29 | 大和剣堀南遺跡 | 弥生 | 弥生土器、土師器 |
| 9 | 谷田古墳群 | 古墳 | 横穴式石室、石棺、耳環、須恵器 | 30 | 西の原町(4号墳) | 古墳 | 円墳 |
| 10 | 宮ノ塚遺跡 | 縄文 | 織文土器 | 31 | 西の原町(1号墳)遺跡 | 古墳 | 前方後円墳、圓溝 |
| 11 | 上中林遺跡 | 縄文 | 縄文土器、石鏡 | 32 | 西の原町(2号墳) | 古墳 | 円墳、刀劍 |
| 12 | 寺ノ久保遺跡 | 弥生、古墳、中世 | 住居跡、窓、立面柱、弥生土器 | 33 | 西の原町(3号墳) | 古墳 | 円墳 |
| 13 | 五輪平遺跡 | 縄文 | 縄文土器、打製石斧、石器 | 34 | 幡原前古墳 | 古墳 | 円墳 |
| 14 | 柏田山古墳群 | 古墳 | 横穴式石室、馬具 | 35 | 東高古墳群 | 古墳 | 円墳、須恵器、虎皮、麻羅 |
| 15 | 門前坪古墳 | 古墳 | 横穴式石室、大刀、鉢、土器 | 36 | 東應古墳 | 古墳 | 須恵器、金、銀團、ガラス小玉 |
| 16 | 柏田山古墳 | 古墳(後) | -- | 37 | 御原根原古墳 | 古墳 | 円墳 |
| 17 | 本覚寺裏遺跡 | 縄文 | 縄文土器、打製石斧、石器 | 38 | 笠山古墳 | 古墳 | -- |
| 18 | 合合山遺跡 | 古墳、古代 | 集落跡、井戸跡、土器群、須恵器 | 39 | 西の原六号 | 古墳 | 横穴式石室 |
| 19 | 白舎入遺跡 | 弥生、古墳 | 弥生土器、土師器 | 40 | 東走若塙 | 古墳 | 横穴式石室、須恵器 |
| 20 | 三座山墓内遺跡 | 弥生、古墳 | 土師器、須恵器 | 41 | 砂原聚落 | 中世 | -- |
| 21 | 豈田遺跡 | 弥生、古墳 | 住居跡、溝、弥生土器、土師器 | 42 | 日本平遺跡 | 先史器、縄文 | 船形、尖頭器 |
| 22 | 有束遺跡 | 弥生(中・後)、中世 | 住居跡、水田跡、万葉周溝 | 43 | 天神山下遺跡 | 弥生、古墳 | 弥生土器、土師器、圓窓器 |
| 23 | 笠呂遺跡 | 弥生(後)、古墳 | 住居跡、高床倉庫跡、住生土器 | 44 | 大矢山古墳群 | 古墳 | 横穴式石室、須恵器、刀劍 |
| 24 | 天神森遺跡 | 古墳 | 土師器 | 45 | 十日根八木山古墳 | 古墳 | 横穴式石室、圓窓器 |
| 25 | 水光寺遺跡 | 古墳(前) | 土師器、砾石 | 46 | 毛切山遺跡 | 古墳 | 土師器、須恵器 |
| 26 | 白島遺跡 | 弥生、古墳 | 弥生土器、土師器 | 47 | 矢見船 | 平安 | -- |
| 27 | 沙入遺跡 | 弥生、古墳、中世 | 住居跡、高床倉庫跡、弥生土器 | 48 | 北之原古墳 | 古代 | -- |
| 28 | 元気川沖原野遺跡 | 縄文(大・中世) | 住居跡、縄文土器、高床倉庫跡 | 49 | 便山遺跡 | 古墳、古代 | 土師器、須恵器 |
| 29 | 朝ノ山八塚 | 縄文(中) | 石器、石斧、縄文土器、石器 | 50 | 那須山古墳群 | 古墳 | 横穴式石室、須恵器、刀身 |
| 30 | 朝ノ内山古墳 | 古墳 | 横穴式石室 | 51 | 妙音寺遺跡 | 弥生 | 木製品、石鏡、砾石 |
| 31 | 朝ノ山古墳遺跡 | 弥生 | 弥生土器、石器 | 52 | 天王山古墳群 | 古墳 | 横穴式石室、石棺 |
| 32 | 小吉良遺跡 | 古墳 | 横穴式石室、石棺、人刀、須恵器 | 53 | 天王山遺跡 | 古墳 | -- |
| 33 | 那須山古墳(古墳) | 弥生 | 弥生土器 | 54 | 天王山北遺跡 | 縄文～古墳 | 縄文土器、打製石斧、土師器 |
| 34 | 大段山遺跡 | 旧石器 | ブレード | 55 | 天王山西山遺跡 | 縄文～古墳 | 縄文土器、石斧、土師器、須恵器 |
| 35 | 大段丘遺跡 | 縄文 | 縄文土器、石器 | 56 | 天王山遺跡 | 縄文～古墳 | 縄文土器、弥生土器、土師器 |
| 36 | 鳥大屋遺跡(古墳群) | 縄文(前)、古墳(末) | 縄文土器、瓦砾石フレイク、横穴式石室 | 57 | 天王山東山遺跡 | 古墳 | 土師器 |
| 37 | さざご段遺跡 | 縄文 | 縄文土器、石器 | 58 | 天王山東山1遺跡 | 縄文～古墳 | 縄文土器、土師器、須恵器 |
| 38 | さざご段古墳 | 古墳(後) | 大刀、須恵器 | 59 | 弓削 | 古代 | -- |
| 39 | 大段丘遺跡 | 縄文(中) | 縄文土器、石器、石器、石器 | 60 | 天王山西2遺跡 | 縄文～古墳 | 土師器、須恵器 |
| 40 | 移大内古墳群 | 古墳 | 横穴式石室、組合場面石棺 | 61 | 天王山南1遺跡 | 縄文～古墳 | 縄文土器、弥生土器、土師器 |
| 41 | 片山遺跡 | (佐佐後)、古墳、近世 | 溝、弥生土器、石器、土師器 | 62 | 天王山南1遺跡 | 縄文～古墳 | 縄文土器、打製石斧、土師器 |
| 42 | 片山唐跡 | 古代 | 食堂、窓、須恵器、瓦、須恵器、土師器 | 63 | 天王山南2遺跡 | 古墳 | 土師器、家恵器 |
| 43 | 白山神社山古墳 | 古墳 | 横穴式石室 | 64 | 天王山南2遺跡 | 古墳 | 土師器、須恵器 |
| 44 | 宮川(小段)遺跡 | 弥生器～古代、近世 | 土坑、内蔵萬葉草、ナイフ等石器 | 65 | 天王山西3遺跡 | 縄文～古墳 | 縄文土器、石斧、土師器、須恵器 |
| 45 | 宮川古墳群 | 古墳(後) | 横穴式石室、石器、組合場面石棺 | 66 | 天王山遺跡 | 縄文～古墳 | 縄文土器、弥生土器、土師器 |
| 46 | 石原塗古墳群 | 古墳(後) | 須恵器 | 67 | 天王山南3遺跡 | 縄文～古墳 | 縄文土器、土師器、須恵器 |
| 47 | 片山穴穴 | 古墳(後) | 須恵器 | 68 | 向山遺跡 | 中世 | -- |
| 48 | 横舟寺保瓦塚跡 | 古代 | 片山廢寺、東壁、平窓、瓦 | 69 | 余北遺跡 | 弥生～平安 | 水田跡、古代稻田遺跡、木製品、木櫛 |
| 49 | 伊佐奈母(須須母)遺跡 | 縄文 | 縄文土器、石器 | 70 | 小国豊田合併遺跡 | 古墳 | 横穴式石室、須恵器、刀子 |
| 50 | 伊佐伊稚兒群(北台) | 古墳(後) | 須恵器、土師器、金具、大刀 | 71 | 小国松本合併遺跡 | 平安～中世 | 水田跡、井戸、土師器、灰陶鍋器、古窯跡 |
| 51 | 伊佐伊稚兒群(南段) | 古墳(後) | 瓦、器、須恵器、土師器、棒 | 72 | 東原ノ洋遺跡 | 弥生～古墳 | 溝、瓶立柱、弥生土器、土師器 |

弥生中期後半になると巴川流域を中心に有東式土器を出土する遺跡が、また、静岡平野の南部の低地では有東式土器とともに木製農耕具の出土する遺跡が確認されており、丘陵部から平地へと人々の生活域が広がりを見せたと考えられる。この時期の有度丘陵では、本遺跡の西に隣接する桃源寺前遺跡から弥生の土器片が出土している。

登呂遺跡をはじめとして、遺跡の数が静岡平野で急激に増加する弥生後期には、平野部での水田耕作を中心とした人々の営みが確認されているが、扁状地の微高部や丘陵部においても生活の確かな痕跡が確認されている。有度丘陵においては南西の上ノ山遺跡で弥生後期～古墳前期の住居跡が掘立柱建物跡、溝状造構や土壤とともに大量に検出されている。118軒にもおよぶこれらの住居跡は円形プランをはじめ、隅丸方形や方形プランを呈するものであり、この時期の有度丘陵での集落の在り方を考えるうえで、注目される。

古墳時代に入ると、平野部の水田や集落とともに、静岡平野の丘陵部には古墳の造営が始まる。中でも、最古の古墳としては、谷津山山頂部に構築された古墳時代前期中頃の植木山神古墳があげられる。全長約110mを測る静岡・清水地区最大規模の前方後円墳であり、この時期、静岡地区全域に及ぶ支配勢力の誕生を物語るものとされている。古墳時代前中期に入ると、庵原丘陵に全長約60mを測る前方後円墳の三池平古墳が築造され、庵原地区に一大支配勢力を及ぼしたと考えられている。やがて古墳時代中期末～後期初頭にかけて有度丘陵北縁の谷田原に全長46mの前方後円墳である瓢箪塚古墳が築造され静岡平野東部の盟主となつたと考えられている。そして、古墳時代後期には、安倍川右岸～戦機山・谷津山・八幡山そして有度山にかけて多くの古墳が出現するが、それらは、やや規模の大きな方墳や小規模な円墳または墳丘を持たない横穴であり、支配構造が分散する様子がうかがえる。有度丘陵では、台地性丘陵である大段、谷田原、草薙原にこうした古墳が多く分布しており、宮川原先端部では方墳の丸山古墳を中心に、宮川古墳群を形成している。

参考文献

- 土 隆一「静岡・清水平野とその周辺の地形、地質」『静岡・清水地域の地質 地質図説明書改訂版』静岡商工会議所 1976
- 『上ノ山遺跡発掘調査(第1次)概報Ⅰ』静岡市教育委員会・上ノ山遺跡発掘調査団 1984
- 大澤和夫「有渡山塊の考古學的調査」『静岡縣郷土研究第五号』静岡縣郷土研究協會 1936
- 『静岡埋蔵文化財調査研究所調査報告第5集大谷川Ⅰ』財團法人駿府博物館付属静岡埋蔵文化財調査研究所 1984
- 『特別展 静岡・清水平野の弥生時代』静岡市登呂博物館 1988
- 『静岡県文化財地名表Ⅰ』静岡県教育委員会 1988
- 『特別展 静岡・清水平野の古墳時代』静岡市登呂博物館 1990
- 『県史 資料編1 考古編一』静岡県教育委員会 1990
- 『財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第27集長崎遺跡Ⅰ(遺構編)』財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1991
- 『県史 通史編1 原始・古代』静岡県教育委員会 1994

第4章 基本層序

東原ノ坪遺跡は南東から北西方向に緩やかに傾斜する段丘面上に立地している（調査区東端の標高53.3 m、西端 52.7 m）。現地表面は南東から北西方向に微高地と浅谷を形成しており、基盤層である国吉田疊層から現地表面までの堆積は微高地で薄く、浅谷部で厚い。

遺構はII層またはIII層中から疊層の頂部まで切り込んで構築された形で検出されるものが多いが、堆積の厚い浅谷部に集中する傾向が認められた。一方、微高地部分では堆積が薄いことと、茶畑による削平が及んでいることもあり、検出できる遺構は少なかった。

調査区内で確認した土層は第5図に示したように、大きく8層に分かれる。以下、各層についてその状況等を見ていくことにする。

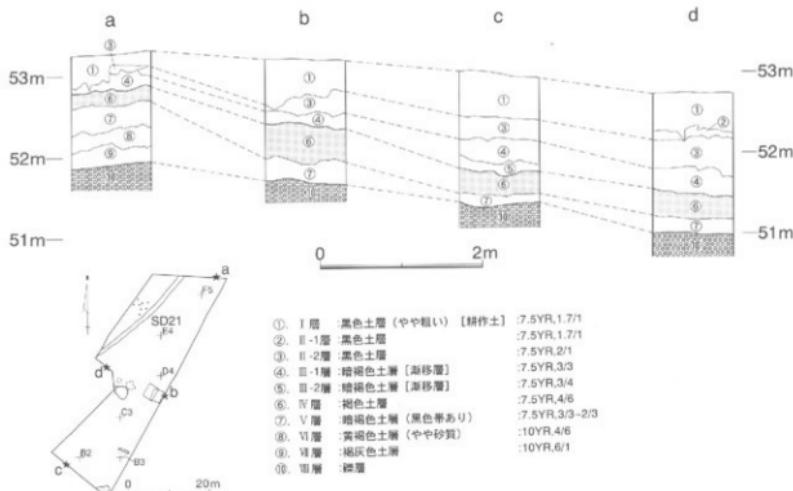
I層 黒色土層（耕作土）

茶畑の耕作土であり、やや粗い粒子で構成され、しまりはない。改植に伴う攪拌や削平が見られる。層厚は約20 cm～60 cmを測る。

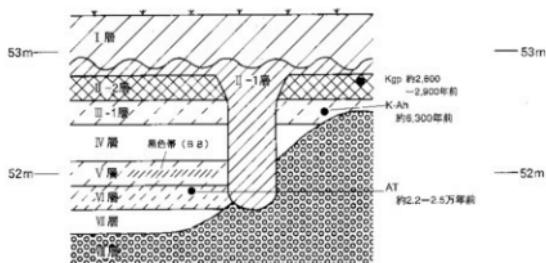
II層 黒色土層

有度丘陵を含め、一般的には「黒ボク土」と呼ばれている、腐植土層である。細砂を含み、粘性は普通であるが、堆積の薄い調査区東北部では茶畑の耕作の影響を受け、削平されている。層厚は約30 cm～50 cmを測るが、堆積の厚い調査区西半部では、やや明度の高い上層のII-1層と明度の低いII-2層に分層できる。II-1層は層厚約10 cmを測り、II-2層は約10 cm～50 cmを測る。II層中には、白色の微細粒子が含まれ、下層の褐色土中まで検出されたが、水酸化アルミニウムを成分とするギブサイトという鉱物であることが判明した。このギブサイトは牧の原台地や磐田原台地でも検出されている（加藤芳朗氏）。

本遺跡では、II層中に遺構の多くが構築されており、少量ではあるが出土した遺物から、弥生時代後



第5-1図 土層柱状図



第5-2図 標準土層図

期～古墳時代前期の文化面としてII層をとらえることができる。

一方、自然科学分析(テフラ分析)の結果、II-2層上部にカワゴ平蛭石(Kgp)の降灰層準が確認されている。

III層 暗褐色土層

小さな礫を含み、粘性はやや高い。調査区のほぼ全域で堆積が認められ、層厚約20cm～50cmを測る(III-1層)。調査区南西部では、明度が低く、粘性の高いIII-2層に分層できる。IV層からII層にかけての漸移層である。III-1層中からは、鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah)の降灰層準が確認された。

IV層 褐色土層

粘性が高く、やや赤みをもつ。調査区全域に堆積しており、層厚は約20cm～50cmを測る。遺構の多くはIV層にII層が落ち込んだ形で検出された。

V層 暗褐色土層

粘性が高く、層厚約10cm～35cmを測る。ギブサイトの白色微細粒子を多く含む。調査区中央部～南半部において、中層に黒色帯(BB)が見られる。

VI層 黄褐色土層

粘性がやや高く、層厚約10cm～30cmを測る。細砂や風化した礫を含み、軟質土である。調査区北東部に堆積しており、水の影響を受けていると考えられる。自然科学分析では始良火山灰(AT)の降灰層準が検出された。

VII層 純灰色土層

粘性は普通であり、他の層に比べて細砂をやや多く含む。層厚約15cm～25cmを測る。VI層と同じく、調査区北東部に堆積が見られ、VII層同様、水の影響を受けていると考えられる。

VIII層 磧層(国吉田礧層)

吉田川から供給された大小の円礧・亜円礧を含む。本調査区の基盤層を成すが、南東から北西方向にかけて凹凸のある波状の堆積を示しており、現地表面に見られる微高地・浅谷部を形成している。

第5章 遺構・遺物の概要

第1節 遺構 (第6~9図、カラー図版1・2、図版1・2)

遺構の多くは、第3調査面(IV層)上面で検出した。第1・2調査面(II・III層)が黒色土と暗褐色土であり、平面精査での遺構検出が困難であったこともあり、遺構の本来の立ち上がりが確認できないものが多かったが、溝状遺構2条、配石遺構1カ所、集石遺構2カ所、柱穴・小穴34カ所、掘立柱建物跡2棟、土坑または溝と考えられる遺構2カ所および風倒木痕1カ所を検出した。出土遺物および覆土から、配石・集石遺構を除き、これらの遺構は弥生時代後期～古墳時代前期に構築されたものと思われる。

遺構検出面となったIV層上面は、調査区南東端を最高点とし(標高52.9m)、調査区中央部西端を最低点として(標高51.6m)、西方向に傾斜している。また、北西方向に浅谷部と微高地が見られ、遺構の多くは下層の疊層が深く、上層の堆積が厚い浅谷部に構築されていた。唯一、SD 21のみ浅谷部～微高地にまたがり、さらに、微高地においては疊層を掘削して溝の底部が構築されている。

以下、個々の遺構について検出状況を述べる。

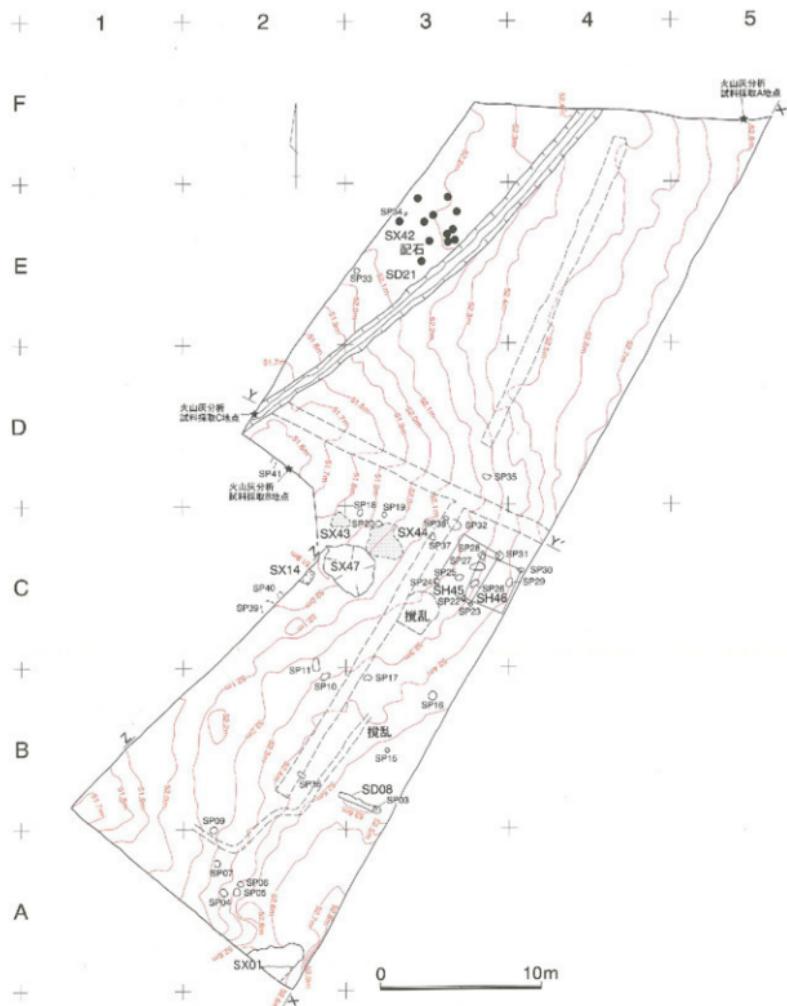
1. 溝状遺構

SD 08 (図版4)

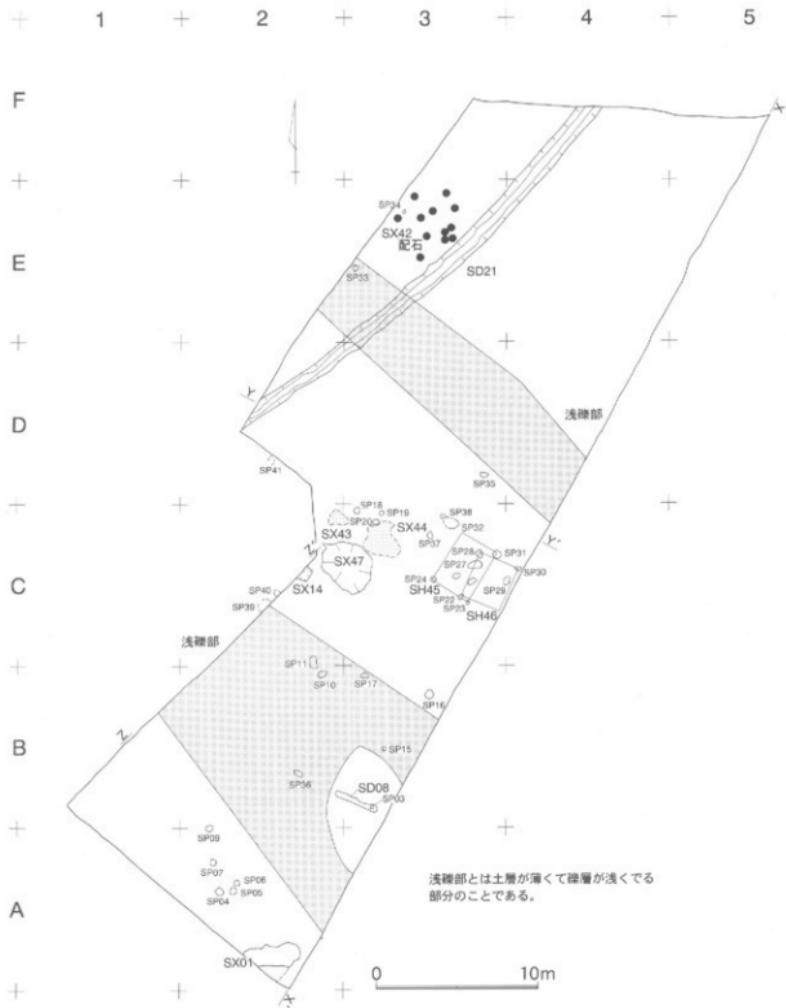
B3グリッド南西で検出したSD 08は、長さ2.8m、幅約30cm、深さ約10cmを測り、方位はN-65°-Wで、U字形の断面をなしている。検出時は浅い溝であるが、II-2層を覆土としていることから、本来の立ち上がりはより上部であると考えられる。また、溝の東端から40cmの地点で、溝底部を切り込んだ小穴SP 03が検出された。溝の廃絶後に小穴が構築されたと考えられる。

SD 21 (第10・11図、カラー図版2、図版3)

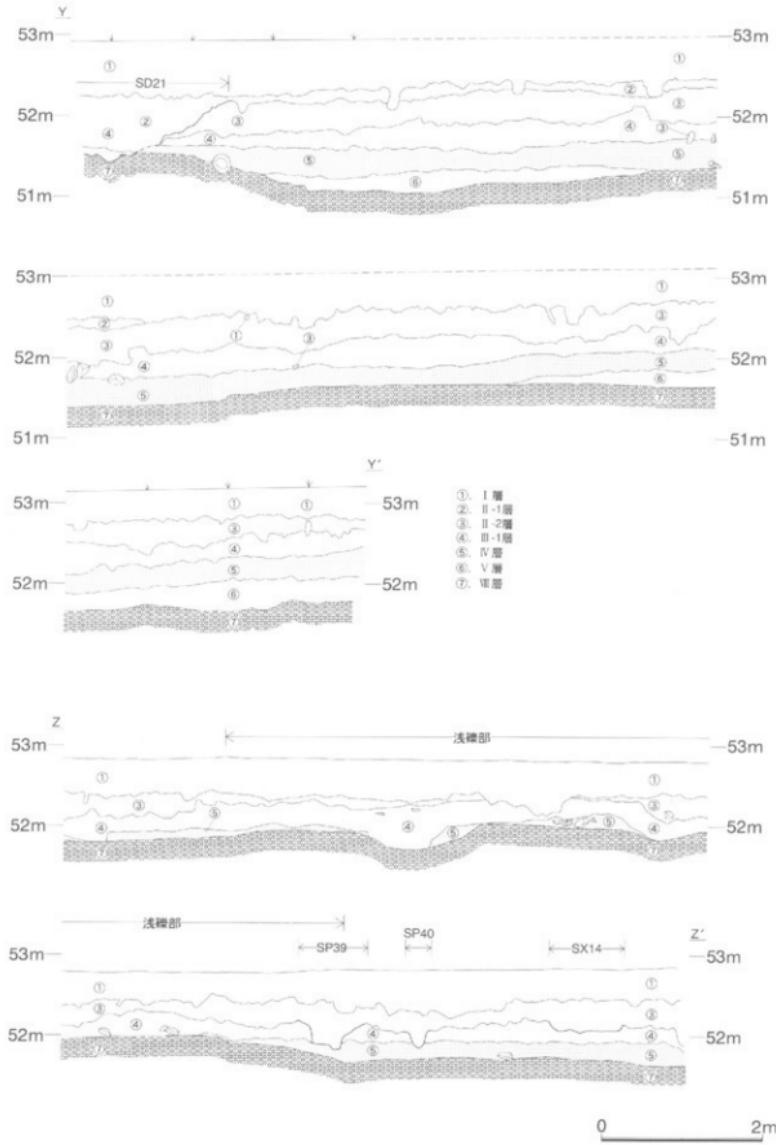
D2グリッドからF4グリッドにかけて検出したSD 21は、検出長30m、幅約60cm～110cm、深さ約25cm～70cmを測り、上部に広く開いたV字形をなしている。溝の両端が調査区外に及んでいるため、全体のプランは不明瞭である。方位は北端ではN-40°-E、南端ではN-52°-Eを示し、僅かではあるが湾曲している。本来の立ち上がりについては北法、西法面の土層観察から、II-2層から切り込み、疊層上面を底部として構築された溝であることが確認できた。また、北端と南端の底面の比高差が40cmあり、北から南へ緩やかに傾斜している。覆土は上層にII-2層が、下層にIII-1層がレンズ状に堆積している。規模の大きさから、集落の小規模な単位の区画を目的の一つとして構築されたものと考えられる。遺物は弥生後期～古墳前期の土器片が8点出土した。これらの多くは、溝の南半部に集中して出土した。



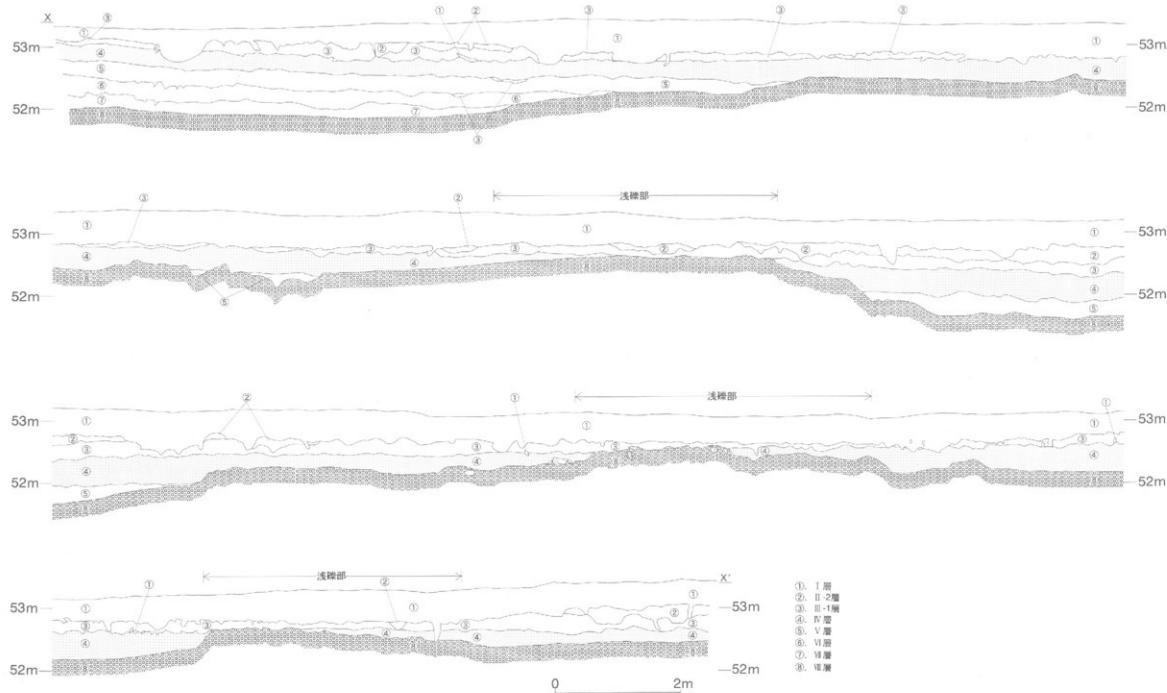
第6図 IV層上面全体図



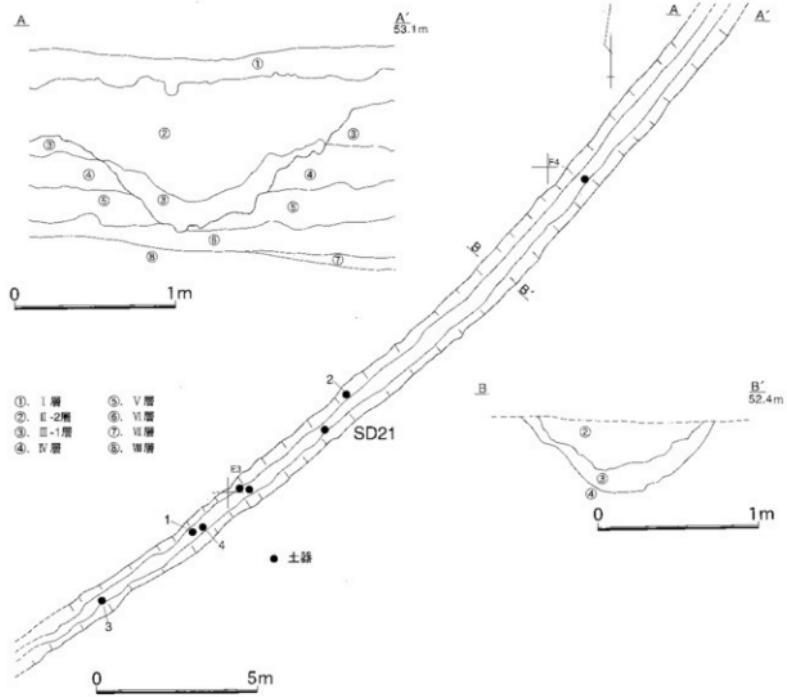
第7図 浅礫部全体図



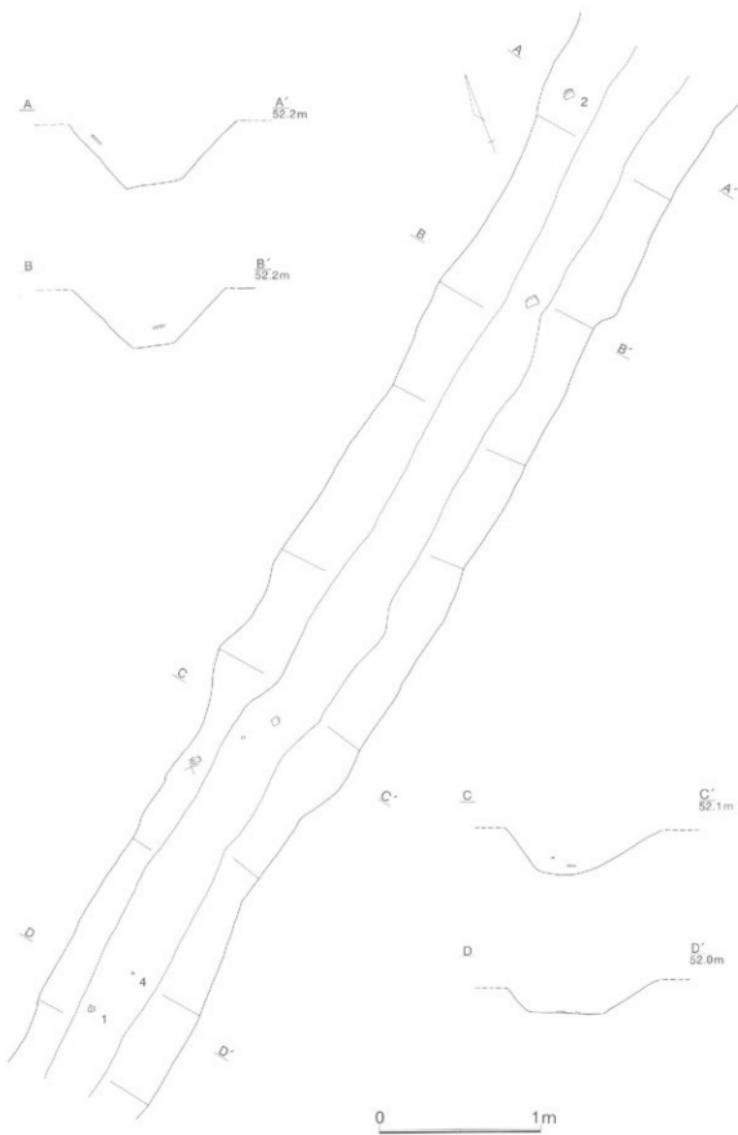
第8図 土層図(1)



第9図 土層図(2)



第10図 SD 21 実測図



第 11 図 SD 21 土器出土状況図

2. 掘立柱建物跡と小穴（柱穴）群

小穴（柱穴）は、標高値の低い浅谷部に集中している（第6図）。建物は微高地に構築される場合が一般的であるが、東原ノ坪遺跡の場合、立ち上がりがII—2層上面に認められる柱穴があり（第8図、図版1・5）、建物の構築面をII—2層上面と推定すれば、柱穴の底部にあたるIV層上面との比高差が、微高地（浅谷部）では極めて小さく、直接疊層が露出する地点もあり、結果的に、柱穴の深さが十分得られないかかったためではないかと考えられる。

小穴（柱穴）は調査区内で大きく4群にまとまって検出された。遺構の計測値については第2表観察一覧に示した。以下、小群毎に検出状況を述べる。

A 2グリッド付近では5カ所を検出した。覆土はII—2層および一部にIII—1層の混入が見られた。A 2グリッド北東部にはN—8°—Wで直線状に1mの等間隔で並ぶ小穴群（S P 04・07・09）が認められ、掘立柱建物跡となる可能性も考えられる。

B 2グリッドからB 3グリッドにかけては、7カ所を検出した。まとまりが認められず、個々の用途も不明である。

C 2グリッドからC 4グリッドにかけては、20カ所を検出した。小穴（柱穴）の集中する地点であり、浅谷部であるため、柱穴の構築が容易だったことがうかがえる。特に、C 3グリッド西半部からC 4グリッド東端にかけて、北西方向の腰傾斜地にその方向に平行する南北方向の建物跡を2棟検出した。以下、これらの建物跡について述べる。

S H 45（第12・13図）

C 3グリッドに位置し、1間×1間の掘立柱建物跡である。桁行3.7m、梁間2.8m、平面積10.36m²である。S P 23、24、31がその柱穴となり、それぞれ検出面での長径、短径、深さは、S P 23：26.0cm、23.5cm、12.2cm、S P 24：37.0cm、35.0cm、17.2cm、S P 31：53.5cm、53.0cm、15.1cmを測る。

第2表 小穴観察表

単位：cm、（ ）推定値

| No | 番号 | 形態 | 長径 | 短径 | 深さ | 備考 | No | 番号 | 形態 | 長径 | 短径 | 深さ | 備考 |
|----|------|-----|------|------|------|------|----|------|-----|--------|--------|------|------|
| 1 | SP03 | 円形 | 18.5 | 18.5 | 19.7 | 段有 | 18 | SP25 | 楕円形 | 49.0 | 32.0 | 15.6 | 段有 |
| 2 | SP04 | 不整形 | 45.0 | 42.0 | 12.1 | | 19 | SP26 | 楕円形 | 67.0 | 33.0 | 22.4 | 小穴重複 |
| 3 | SP05 | 不整形 | 40.0 | 47.0 | 16.6 | | 20 | SP27 | 不整形 | 89.0 | 45.0 | 11.6 | 小穴重複 |
| 4 | SP06 | 不整形 | 38.0 | 36.0 | 15.3 | | 21 | SP28 | 不整形 | 57.0 | 41.0 | 19.5 | SH46 |
| 5 | SP07 | 不整形 | 40.0 | 33.0 | 10.7 | | 22 | SP29 | 不整形 | 62.5 | 37.0 | 20.0 | 段有 |
| 6 | SP09 | 不整形 | 47.0 | 38.0 | 12.5 | | 23 | SP30 | 不整形 | 47.0 | 32.5 | 17.3 | SH46 |
| 7 | SP10 | 楕円形 | 58.0 | 36.0 | 23.1 | | 24 | SP31 | 楕円形 | 53.5 | 53.0 | 15.1 | SH45 |
| 8 | SP11 | 不整形 | 89.0 | 36.0 | 16.8 | | 25 | SP32 | 楕円形 | (61.0) | — | 22.7 | |
| 9 | SP15 | 円形 | 27.0 | 26.5 | 11.6 | | 26 | SP33 | 不整形 | 34.5 | 29.5 | 6.3 | |
| 10 | SP16 | 円形 | 55.0 | 53.0 | 38.9 | | 27 | SP34 | 不整形 | 23.0 | 15.0 | 11.4 | |
| 11 | SP17 | 楕円形 | 46.0 | 31.0 | 14.3 | 小穴重複 | 28 | SP35 | 不整形 | 41.0 | 35.0 | 19.6 | 段有 |
| 12 | SP18 | 円形 | 33.0 | 32.0 | 14.2 | | 29 | SP36 | 不整形 | (33.5) | (26.5) | 10.8 | |
| 13 | SP19 | 円形 | 34.5 | 33.0 | 14.9 | | 30 | SP37 | 不整形 | 49.5 | 36.0 | 35.0 | 小穴重複 |
| 14 | SP20 | 円形 | 34.0 | 34.0 | 18.3 | | 31 | SP38 | 不整形 | 38.0 | 25.0 | 9.9 | |
| 15 | SP22 | 不整形 | 32.0 | 23.5 | 10.3 | SH46 | 32 | SP39 | — | (80.0) | — | 22.0 | |
| 16 | SP23 | 円形 | 26.0 | 23.5 | 12.2 | SH45 | 33 | SP40 | — | (30.0) | — | 32.0 | |
| 17 | SP24 | 円形 | 37.0 | 35.0 | 17.2 | SH45 | 34 | SP41 | — | (31.0) | — | 49.0 | |

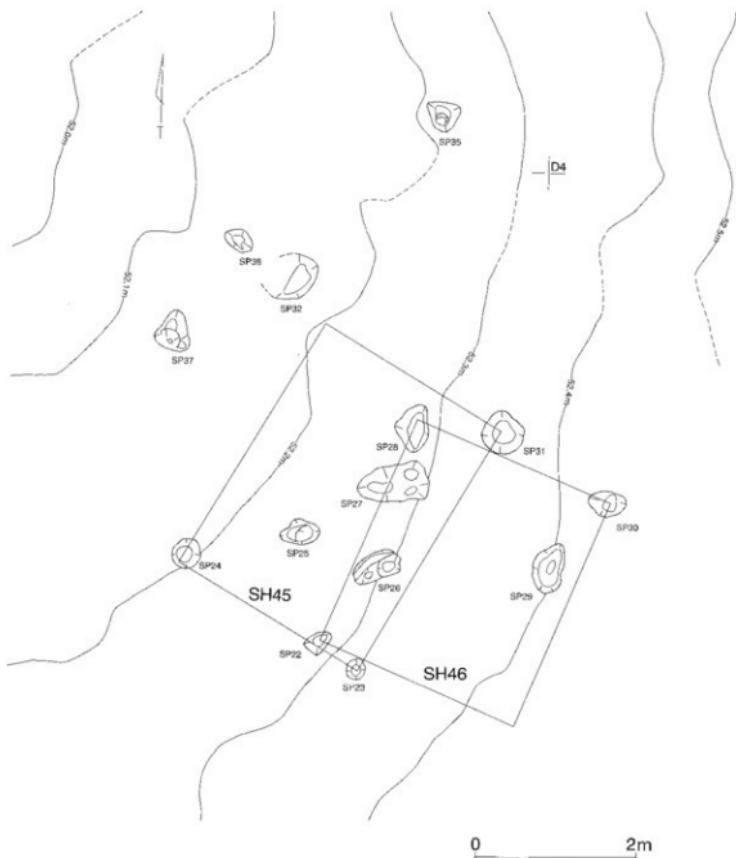
南北棟で棟方位はN—32°—Eである。遺物は検出されなかった。

S H 46 (第12・13図)

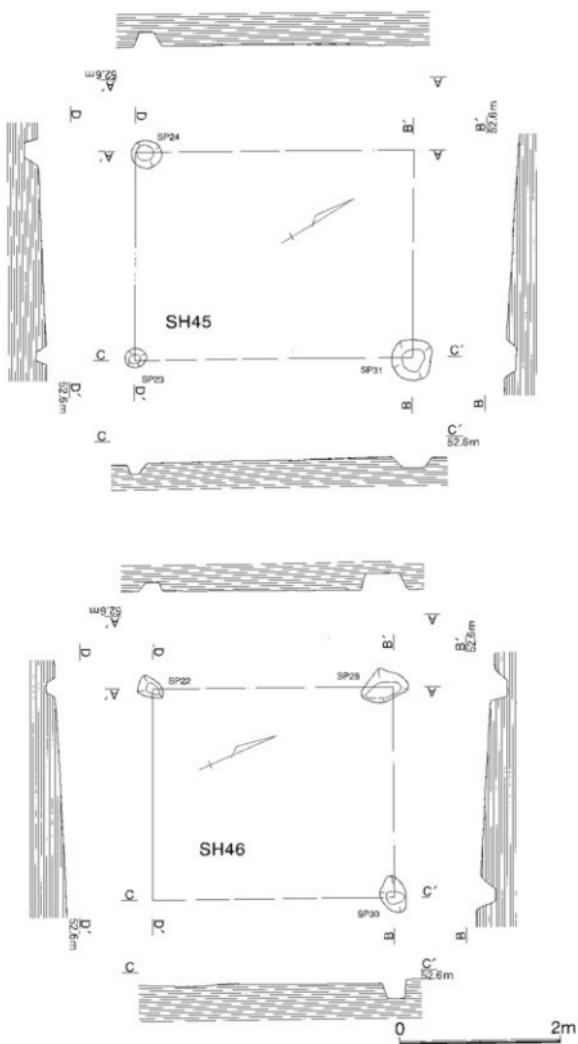
C 3 グリッドに位置し、1間×1間の掘立柱建物跡である。桁行3.2 m、梁間2.6 m、平面積8.32 m²である。S P 22, 28, 30がその柱穴となり、それぞれ検出面での長径、短径、深さは、S P 22: 32.0 cm、23.5 cm、10.3 cm、S P 28: 57.0 cm、41.0 cm、19.5 cm、S P 30: 47.0 cm、32.5 cm、17.3 cmを測る。南北棟で棟方位はN—23°—Eである。遺物は検出されなかった。

以上の2棟は重複した形で確認されたが、新旧関係は不明である。

また、E 3 グリッドでは、小穴2カ所を検出した。小規模かつ少數の小穴群であるため、用途は不明である。



第12図 掘立柱建物群全体図



第13図 据立柱建物跡 S H 45・46 実測図

3. 集石・配石

S X 42 配石（第 14 図、図版 3・6）

本遺構は標高 52.2 m の E 3 グリッド、IV 層上面に位置する。4.2 m × 3.5 m の範囲に 10 cm から 25 cm の大きさの礫 13 個で構成されている。平面形は不整形を呈する。焼け石、遺物及び基底部下の土坑は検出されなかった。

S X 43 集石（第 14 図、図版 6）

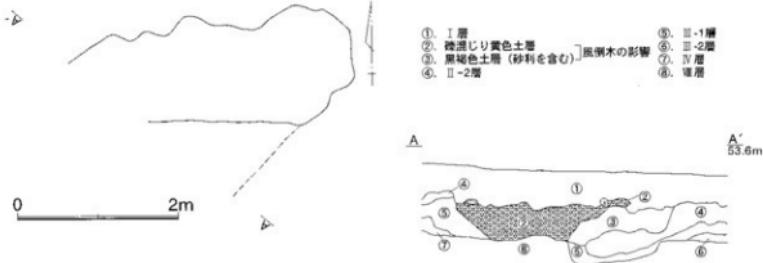
本遺構は標高 51.8 m の C 2 ~ C 3 グリッド、IV 層上面に位置する。長軸 1.1 m × 短軸 0.7 m の範囲に 5 cm から 25 cm の大きさの礫で構成されている。平面形は不整形を呈する。焼け石、遺物及び基底部下の土坑は検出されなかった。

S X 44 集石（第 14 図、図版 7）

本遺構は標高 52.0 m の C 3 グリッド、IV 層上面に位置する。長軸 2.1 m × 短軸 2.0 m、厚さ 30 cm の



第 14 図 配石 S X 42・集石 S X 43・44 実測図



第 15 図 S X 01 風倒木痕実測図

範囲に 5 cm から 35 cm の大きさの礫（河原石）で構成されている。平面形は楕円形を呈する。VII 層の礫を何らかの目的で、集め、積み重ねたものと考えられるが用途は不明である。焼け石、遺物及び基底部下の土坑は検出されなかつた。

なお、S X 43、44 は隣接する遺構である。

4. 土坑または溝

S X 14 (第 9 図)

C 2 グリッドに位置し、調査区外に続くため遺構全体のプランは不明瞭である。III-1 層を 15 cm 程掘り込んでおり、覆土は II-2 層、断面はごく浅い皿状をなしている。検出長 0.5 m、幅 1.0 m を測る。

S X 47

C 3 グリッドに位置し、IV 層を切り込んだ浅い皿状の断面を呈する。II-2 層を覆土とし、長径 3.8 m、短径 2.7 m、深さ 15 cm を測る。底部は礫層にまで及んでおり、隣接する集石遺構 S X 43・44 の礫の採取地跡とも考えられるが、用途は不明である。

5. 風倒木痕

S X 01 (第 15 図)

A 2 グリッド南西で検出した S X 01 は、検出長約 3.5 m、幅約 100 cm の土坑状を呈し、調査区外南部に続いている。南法面の観察から、土層堆積が III-1 层から乱され、南半部に下部の礫層（VII 層）に由来する礫混じりの黄色土が堆積し、北半部に II-2 層が入り込んだ状況が確認でき、立木が北方向に倒れ、礫層上部に張った根株が持ち上がった風倒木痕であると考えられる。

第2節 遺物（第16図、図版8）

東原ノ坪遺跡では土器が11点、銅鏡が1点出土した。そのうち調査区北西部で検出されたSD 21の覆土（II-2層）中から土器片が8点出土した。いずれも小破片であり、ここでは拓影を4点図示した。1~4はいずれもSD 21南半のE 3グリッド杭付近で、1・3・4は底面で、2は岸斜面から少し浮いた状態で出土した（第10・11図参照）。いずれも壺・甕の小破片である。

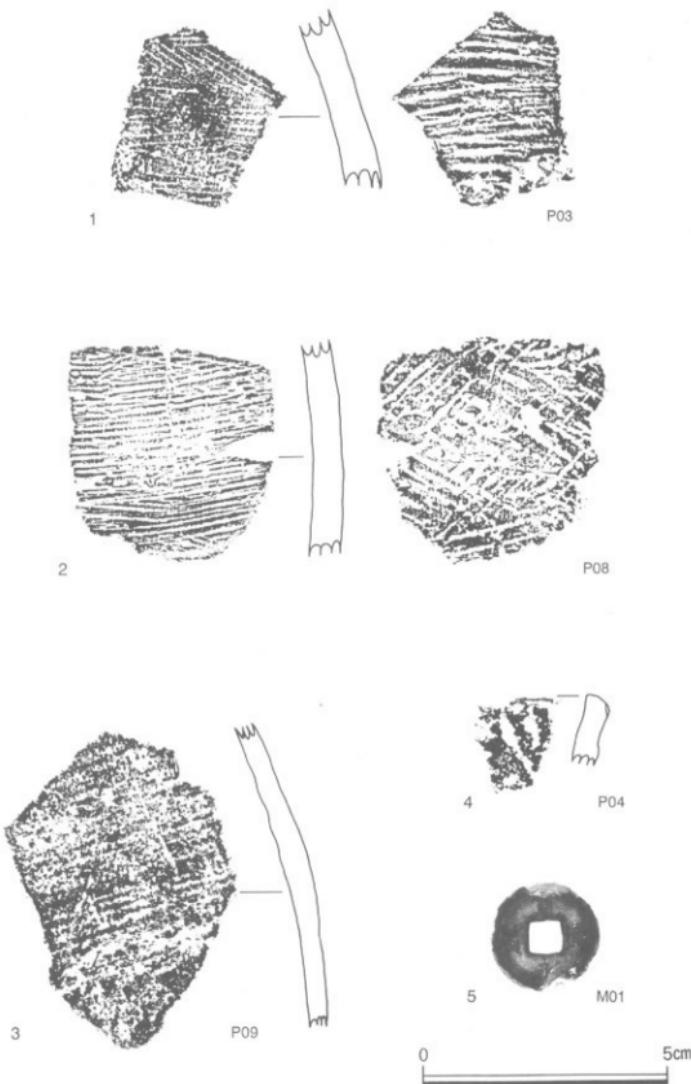
1は壺あるいは甕の胸部と考えられる。内外面に横方向のハケ目調整（内面は細かく、外面は粗い）が施されている。胎土は白色粒子、石粒を多く含み、焼成はやや良好で、外面は橙色、内面はにぶい黄橙色を呈する。2は甕あるいは壺の胸部と考えられる。内面に横方向の細かい、外面にナナメ方向（斜格子状）の粗いハケ目調整が施されている。胎土は白色粒子、石粒を多く含み、赤色粒子、黒色粒子を少し含む。焼成はやや不良で、内外面ともににぶい黄橙色を呈する。3は甕の胸部で、内外面とも横方向のハケ目調整が施されているが、外面は器表剥落が著しい。胎土は白色粒子、石粒を多く含み、赤色粒子を少し含む。焼成は不良で、外面はにぶい橙色、内面はにぶい黄橙色を呈する。4は甕の口縁部で、キザミ目がかすかに残る。胎土は白色粒子、石粒を多く含み、焼成は不良で、内外面とも明黄褐色を呈する。

そのほか拓影を図示することはできなかったが、P 06は器壁が厚く、複合口縁の大型壺の口縁部と考えられる。1~4と同地点で、底面から10cm程浮いた状態で出土した。頸部とのつなぎ目で割れており、内面に接合痕（指頭圧痕）が認められる。胎土は白色粒子を含み、焼成はやや不良で、外面はにぶい橙色、内面は灰黄色を呈する。

これらの土器はハケ目調整等や胎土、焼成から、静清地区で通常つくられていた弥生時代後期～古墳時代前期の弥生土器・土師器と考えられる。

5の銅鏡はD 3グリッド南西部のI層（茶畑耕作土）中から出土し、著しく鏽付いていたが、X線写真撮影の結果、寛永通寶と判明した。そして「寶」字の貝画末尾が「ハ」になっていることから、「新寛永」（初鋤年1697年）と考えられる⁽¹⁾。直径2.25cmを測る。

(1)永井久美男『日本出土鏡総覧 1996年版』1996 兵庫埋蔵鏡調査会 p.47による



第 16 図 土器拓影・銅錢 X 線写真

第6章 まとめ

東原ノ坪遺跡は、從来知られていなかった遺跡であり、今回の調査によって初めてその存在が明らかとなった。調査の結果、当遺跡は弥生時代後期～古墳時代前期の集落跡であることが確認できた。

IV層上面で検出された2棟の掘立柱建物跡については1間×1間の長方形の平面プランを呈しており、有度丘陵南西麓の上ノ山遺跡で確認された建物跡に類似すること等から、この時期、静清平野に広く見られた建物の一つと考えられる。また、これらの建物跡を含めて柱穴の多くに建て替えの痕跡が認められ、建物群が一時的なものではなかったことがうかがえる。また、段丘面上の浅谷部に構築されていたことは調査区内の微高地は疊層が極めて浅く露出するため、建物を構築しにくいという地形を示していることとも関連が深いと考える。

一方、溝状遺構については、調査区外にも及んでいたことから、全体のプランの確認はできなかつたが、微高地と浅疊部を貫通する方向で構築されていることから、意図的に何らかの目的をもって設定された溝と考えられる。また、溝の覆土から出土した土器片は、これまでの調査で弥生時代後期～古墳時代前期に静清地区に見られる一般的な土器であった。

本遺跡はさらに、桃源寺前遺跡の所在する西～南方向に広がりをもつ集落跡と考えられるが、調査範囲も狭く、検出された遺構・遺物も少ないため、集落の性格や特徴は不明である。

有度丘陵では、旧石器時代のブレードが採取された大段I遺跡や縄文土器や石器が出土した堀之内A、大段II、大段III、さきご段の各遺跡が丘陵上に分布していることから、IV層で遺構を検出後、下層の調査も実施したが、遺構・遺物共に検出できなかつた。

また、本遺跡の調査では、土層の堆積年代に関する資料を得る目的で、自然科学分析（地質調査、火山ガラス比分析、テフラ検出分析、屈折率測定）を実施した。その結果、II層上部で天城カワゴ平軽石（Kg、約2,800～2,900年前）、III層中で鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah、約6,300年前）およびVI層上半部に始良Tn火山灰（AT、約2.2～2.5万年前）の降灰層準が認められた。有度丘陵上で火山灰分析を実施したのは今回が初めてであり、指標テフラとの層位関係が求められたことで、今後の調査における遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代に関して有効な資料を提供できたものと考えられる。

最後に、調査ならびに本書の作成に当たって、多くの方々のご指導、ご助言、ご協力をいただいたことに深くお礼申し上げたい。

参考文献

『上ノ山遺跡発掘調査（第1次）概報Ⅰ』静岡市教育委員会・上ノ山遺跡発掘調査団 1984

静岡市東豊田、東原ノ坪遺跡の土層観察所見

加藤芳朗（静岡大学名誉教授）

1. まえがき

静岡市の有度山西麓の2段の段丘（第17図、低位が国吉田面、高位が日本平面²⁾）では、黒色土（黒ボク土）層とその下の褐色土層からなる、厚さ1~3mの土層が段丘疊層の上にのることが知られ、つぎの特徴を有する³⁾。①上位から下位に向かって、カワゴ平軽石（Kgp）、アカホヤ火山灰（Ah）、姶良火山灰（AT）が検出される（第18図）。ただし、明瞭な層としてではなく、分画した細砂の鉱物学的検査から存在が認められるものである。前の2つは黒色土層、最後の1つは褐色土層中にある。②褐色土層には黒色帶（BB）が一枚はさまれ、西端の南端から北端にかけて、よく連続する。高低両段丘上の土層でもそうである。ATはBBのすぐ上に位置する。③細砂（0.2~0.05mm）中の火山灰粒子の量は、多くても、15%以下である。その他は、頁岩・珪質岩などの岩片、石英、長石を中心とし、それらの組成比は、安倍川平野の砂層のそれと酷似する。④これら土層には、最下部を除いて、礫がきわめて少ない。

①、②、④から、これら土層が風成であり、③から、その主材料は火山灰ではなく、安倍川平野からの砂塵である、と考えられる。上記火山灰は砂塵の堆積の合間に降り積もったものである。これと類似の土層は、牧の原台地、磐田原台地、浜北段丘で存在が知られ、それぞれ、大井川、天竜川からの風塵の堆積と推定されている^{4,5)}。同じ風成の愛鷹ロームや関東ロームとは異質なものと見なさなければならない。

第17図 有度山西麓の段丘¹⁾

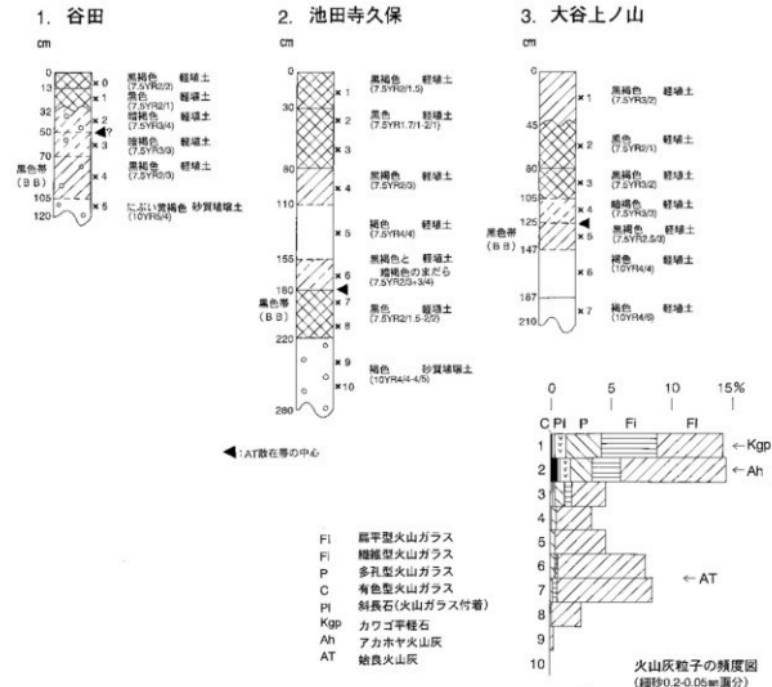
2. 本遺跡の地形・地質、土層

(1) 地形・地質

本遺跡は国吉田面上にあるため、多少の微起伏（後述）はあるものの、ほぼ平坦な台地面に立地する（第17図）。この面には厚さ15m余の段丘疊層とその上の黒色土層、褐色土層（合計厚さ1~3m）がみとめられる。筆者が調べた、寺久保遺跡（静岡市教委発掘、昭和59年）は日本平PAのすぐ東、国吉田面上にある。その土層の特色は上記①~④の通りであり、これと至近距離にある本遺跡の土層構成もこれに類似するものと推定される。

(2) 土層

発掘区の土層帶CのNo.1とNo.2地点（第19図）での観察を総合した土層断面図は第20図Aのごとくである。上から、黒色土層、暗褐色土層、褐色土層、暗褐色土層（BB）、黄色砂質土層からなり、予想したとおりの土層構成である。疊がほとんどないことも似ているので、あとは、細砂の鉱物学的検査による確認を待つだけである。多分、Kgp、Ah、ATなどが第18図から推定される層位に検出され、また、安倍川平野の砂と似た鉱物粒子が多数を占めるものと思われる。なお、1.で触れなかった、こまかい特徴として、イ、黒色土層の下端が不規則な波状をなして、下層に入りこむこと、ロ、白色の微細粒子が含まれる、が挙げられる。これも、有度山西麓の段丘、牧の原台地、磐田原台地上の土層に共通する



第18図 有度山西麓の土層断面図、寺久保断面の火山灰粒子頻度図

ものである。磐田原台地では、白色微細粒子が水酸化アルミニウムを成分とするギブサイトという鉱物からなることが判明している⁸⁾。

(3) 碠層

a. 浅礫部

発掘区内には、第20図Aのような土層の厚い部分のほかに、土層が薄くて礫層（VII層）が浅くでる部分（浅礫部）がある。その1例を試掘坑A北西壁のNo.3地点で見たのが第20図Bである。最下層のV、VI層が欠け、I層の発達がわるい。一般に、一見平坦に見える台地、段丘の表面でもごく浅い凹凸がある。これを浅谷（微凹地）、微高地と呼ぶことが多い。浅谷の土層が厚く、微高地のそれが薄い（浅礫部）のが通例である。雨水の侵食により微高地の土層が流されやすいためである。

ところで、発掘区に北西・南東方向の浅礫部が2帯ある（発掘スタッフ、第19図）。この解説がすぐには下せなかつたが、発掘区周辺の縮尺1,500分の1の詳細地図で謎が解けた。発掘区の下手（北西方向）に、等高線が南東側に向むる浅谷がある。この延長が2帯の浅礫部の間に向かうので、発掘区内の浅礫部の配列パターンが、周辺の国吉田面の浅谷・微高地のそれ一部であることが判明した（第21図）。

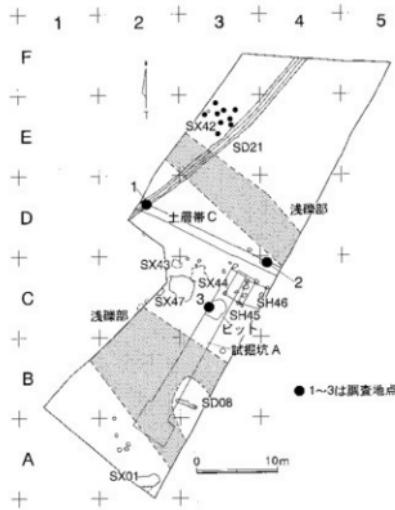
b. 碠のインプリケーション

上から掘り下げるとき、礫が小さい面積で、散在的に出現するので、人為によるものか、自然のものか、判断に迷うところであった。結論的にいうと、この礫は自然堆積で、不規則な凹凸のある段丘礫層の頂部であることが分かった（次述）。

試掘坑A北西壁のNo.3地点で礫層（VII層）中に設けられた約1.5m四方、深さ約0.5mのピットでの観察によると、礫層は円～亜円礫からなり、その間を細礫、砂が満たしていて、河川堆積の特徴を示している。その上、扁平礫がだいたい同じ方向に傾く（インプリケーションという）。これも河川堆積の証拠であるだけでなく、水流の上流側を指示する重要な特徴である。傾きの方向を11個の扁平礫について測定したところ、平均値は南64°東であった。

従って、礫は東南東から運ばれてきたことになる。これは、段丘の北東側を走る吉田川の谷の方向とほぼ一致する。また、この谷の上流で、低位の国吉田面が高位の日本平面の分布域の中に入りこんどおり（第17図）、国吉田面が日本平面を下刻した谷の谷底平地だったことを示す。上記の礫の運動方向はこれを裏書きするものである。

吉田川は小河川なので、本来は、角礫を主とした礫層となるはずだが、円～亜円礫からなるのは、それらが流域に広く露出する久能山礫層、小鹿礫層に由来するからである。両礫層は古安信川の運搬物とされる⁹⁾。上記のピットで、礫の岩質組成を、大きい順に30個調べた結果（直径数cm以上）、砂岩70%、珪質岩20%、火成岩類10%の割合であった。吉田川の現川床の礫（直径3.2～1.6cm）の岩質組成のあらましは、砂岩50%、珪質岩30%、火成岩類10%、その他10%の割合であった⁷⁾。両組成の差は調査した礫の



第19図 発掘区の概要

A. 土層が厚い例



B. 土層が薄い例



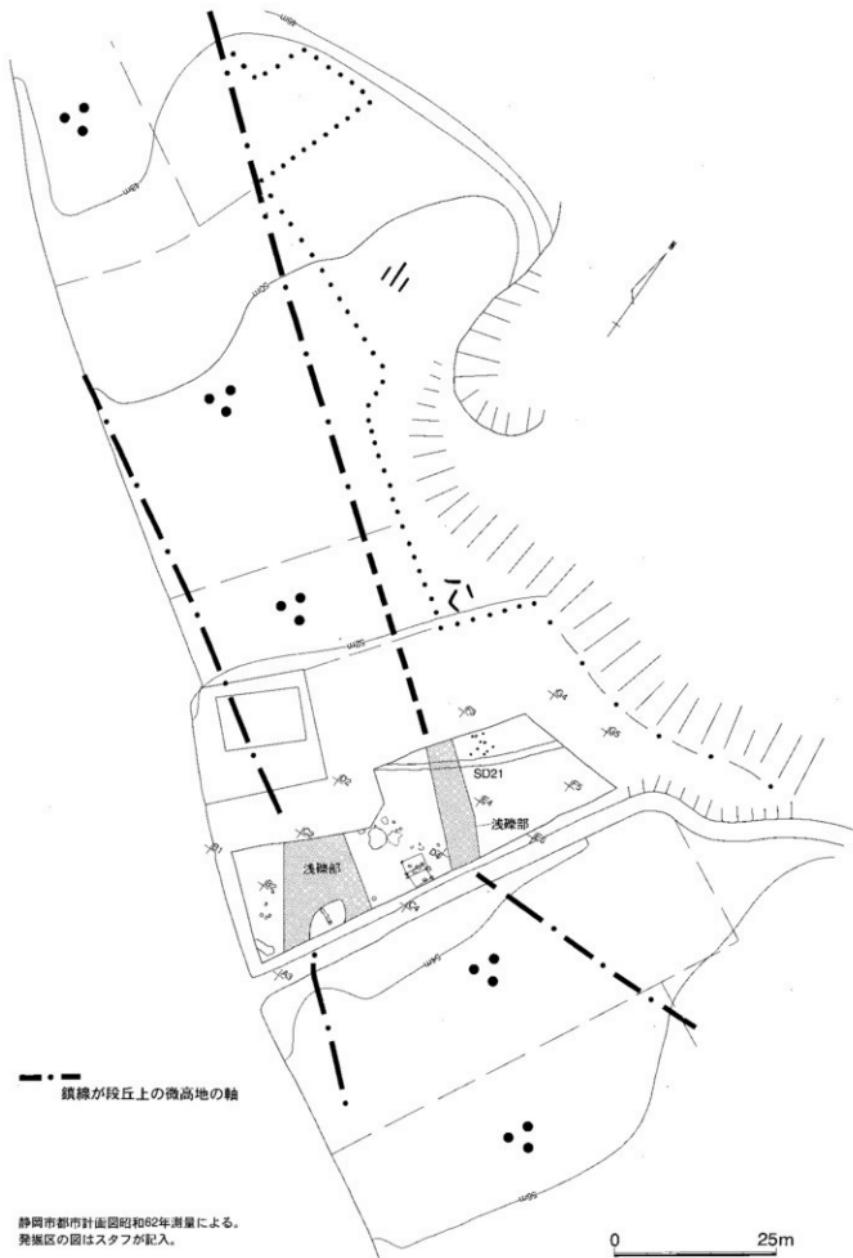
VI、VIIを除き、
いずれも軽埴土質
土層境界は
発掘スタッフのスケッチによる

第20図 土層断面

粒径の違いによるものであろう。

文 献 (引用順)

- 1) 門村 浩(1966)静清地域の地盤と防災上の問題点。「静清地域およびその周辺地域の防災上の諸問題」、p.7-30、静岡県
- 2) 土 隆一(1960)有度山の地質構造ならびに地史。地質学雑誌、66巻、p.639-653
- 3) 加藤芳朗(1987)静岡県の土壤と土地利用。「昭和62年度都道府県土地分類基本調査現地検討会資料」、p.12-19、国土庁
- 4) 加藤芳朗(1985)火山ガラスの探索。「広野北遺跡、本編」、p.19-29、平安博物館
- 5) 加藤芳朗(1996)岩宿時代石器包含層と類似の土層。「勾坂中遺跡発掘調査報告書II(下巻)」、p.821-826、静岡県企業局、磐田市教育委員会
- 6) 渡辺栄次(1996)表層土壤の成分の特徴。同上報告書、p.827-839
- 7) 加藤芳朗(1992)長崎遺跡の水田立地に関する地学的・土壤学的検討。「長崎遺跡II、(遺構編)本文編」、p.245-257、静岡県埋蔵文化財調査研究所



第21図 発掘区の浅礫部と段丘上の微高地

静岡県、東原ノ坪遺跡の火山灰分析

株式会社 古環境研究所

1.はじめに

静岡県域には、富士火山や伊豆半島の火山のほか、九州地方をはじめとして他の地方に分布する火山から噴出したテフラ（火山碎屑物、いわゆる火山灰）が数多く分布している。これらのテフラの中には、すでに噴出年代が明らかにされているものがあり、それら示標テフラとの層位関係を求めるこにより、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代に関する資料を収集できるようになっている。東原ノ坪遺跡の発掘調査では、良好な土層の断面が作成された。そこで土層の形成年代に関する資料を得るために、地質調査、火山ガラス比分析、テフラ検出分析さらに屈折率測定を合わせて行い、示標テフラの層位を明らかにすることになった。調査分析の対象となった地点は、A地点、B地点、C地点の3地点である（第23図）。

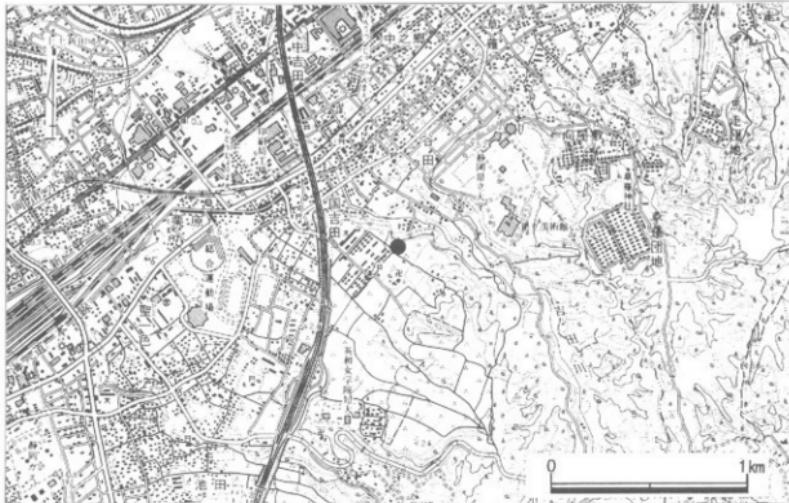
2. 土層の層序

(1) A地点

ここでは亜円錐層の上位に、下位より黄灰色土（層厚17cm, VII層）、灰褐色土（層厚25cm, VI層）、黒灰色土（層厚14cm）、灰色がかかった暗褐色土（層厚11cm, 以上V層）、黄色味を帯びた褐色土（層厚17cm, IV層）、暗褐色土（層厚25cm, III—1層）、黒灰色土（層厚7cm, II—2層）、黒灰色表土（層厚8cm, I層）が認められる（第24図）。

(2) B地点

この地点では亜円錐層の上位に、下位より暗灰色土（層厚7cm, V層）、黄褐色土（層厚30cm, IV層）、



第22図 遺跡の位置

亜円礫混じり暗灰色土（層厚 32 cm, 砕の最大径 28 mm, III-1 層）、黒色土（層厚 40 cm, II-2 層）、黒色土（層厚 12 cm, II-1 層）、黒褐色表土（層厚 40 cm, I 層）が認められる（第 24 図）。

（3）C 地点

ここでは、弥生時代の溝の断面が認められた。溝を埋めた土層は黒色土（層厚 71 cm）である。その上位には、黒褐色表土（層厚 44 cm）が認められる（第 24 図）。

3. 火山ガラス比分析

（1）分析試料と分析方法

A 地点および B 地点において基本的に 5 cm ごとに採取された試料のうち、5 cm おきの 19 試料について火山ガラス比分析を行い、ガラス質の示標テフラの降灰層準を求めるこことを試みた。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料 15 g を秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80°C で恒温乾燥。
- 4) 分析篩により 1/4-1/8 mm の粒子を箇別。
- 5) 偏光顕微鏡下で 250 粒子を観察し、火山ガラスの形態別組成を求める（火山ガラス比分析）。
- 6) 偏光顕微鏡下で重鉱物 250 粒子を観察し、重鉱物組成を求める（重鉱物組成分析）。

（2）分析結果

1) A 地点

火山ガラス比ダイヤグラムを第 25 図に、その内訳を第 3 表に示す。この地点では、試料番号 10、8、2 にごくわずか（0.4%）に透明で平板状のいわゆるバブル型ガラスが認められた。

2) B 地点

火山ガラス比ダイヤグラムを第 25 図に、その内訳を第 4 表に示す。この地点では、試料番号 13 と 11 に淡褐色のバブル型ガラスがごくわずか（0.4%）に認められた。

また試料番号 3 に、分厚い中間型（7.6%）や、スponジ状または纖維束状に発泡した白色軽石型火山ガラス（7.2%）の出現ピークが認められた。これらの軽石型ガラスは、その特徴から約 2,800-2,900 年前に伊豆天城火山カワゴ平火口から噴出した天城カワゴ平軽石（Kg, 町田・新井, 1992）に由来すると考えられる。以上のことから、II-2 層最上部付近に Kg の降灰層準があると考えられる。

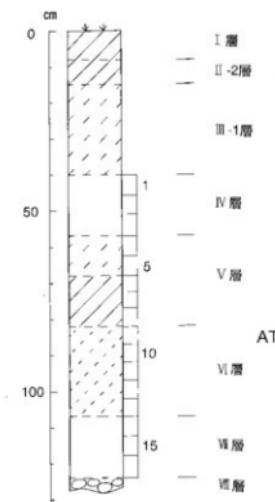
4. テフラ検出分析

（1）分析試料と分析方法

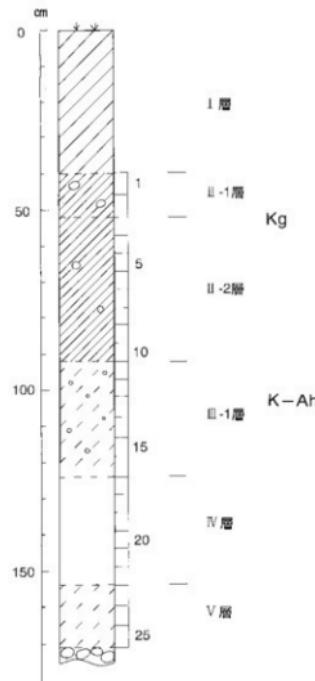
C 地点において基本的に 5 cm ごとに採取された試料のうち、5 cm おきの 7 試料についてテフラ検出分析を行い、軽石やスコリアで特徴づけ



第 23 図 火山灰分析試料採取地点平面図

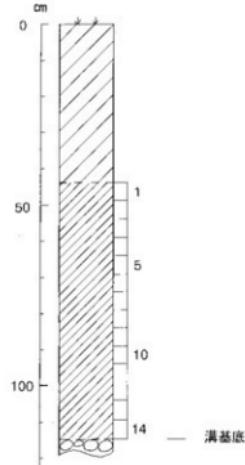


A 地点

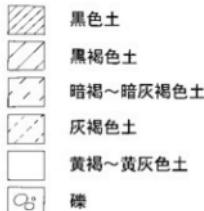


B 地点

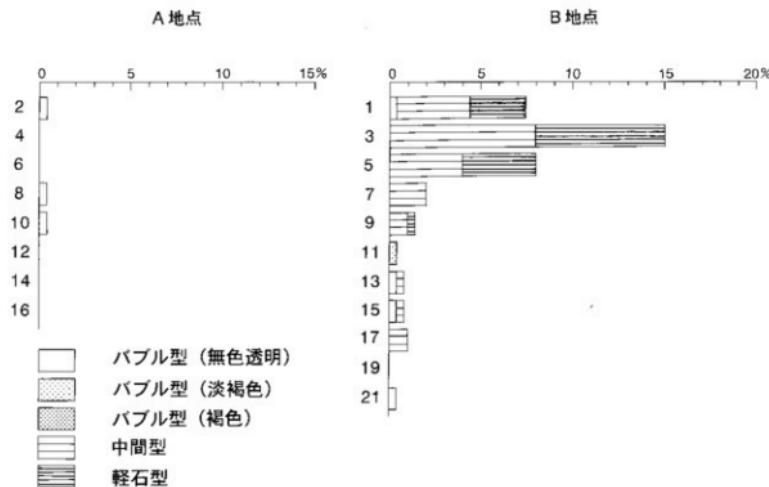
数字はテフラ分析の試料番号



C 地点



第24図 A・B・C地点の土層柱状図



第25図 A・B地点の火山ガラス比ダイヤグラム

られる示標テフラの降灰層準を求める試みを試みた。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料 15 g を秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の種類や特徴を観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を、第5表に示す。若干の量の違いはあるものの、いずれの試料にもスponジ状または纖維束状に発泡した白色軽石（最大径 1.2 mm）が認められた。この軽石は、Kgに由来すると考えられる。試料番号 10 には黒色のスコリア（最大径 1.0 mm）も認められたもの、その量は少なく、示標テフラと同定するまでに至らなかった。少なくとも、この溝の構築は約 2,900 年前以降と推定される。

5. 屈折率測定結果（第6表）

(1) 測定試料と測定方法

火山ガラス比分析を行った試料のうち、特徴的な火山ガラスが認められた 3 試料について、位相差法（新井、1972）により屈折率の測定を行い、示標テフラとの同定の精度の向上を図った。測定の対象となった試料は、A 地点試料番号 10、B 地点試料番号 13、B 地点試料番号 17 の 3 試料である。

(2) 測定結果

A 地点の試料番号 10 に含まれる火山ガラスの屈折率 (n) は、1.499–1.501(中央値: 1.500) である。この試料に含まれる火山ガラスは、その形態や色調さらに屈折率などから、約 2.2–2.5 万年前に南九州の姶良カルデラから噴出した姶良 Tn 火山灰 (AT, 町田・新井, 1976, 1992) に由来すると考えられる。B 地点試料番号 17 に含まれる火山ガラスも、その屈折率から AT 起源の可能性が大きい。B 地点試料番号 13 に含まれる火山ガラスの屈折率 (n) は 1.499–1.512 である。中央値は、1.499–1.501 と 1.509–1.

第3表 東原ノ坪遺跡A地点の火山ガラス比分析結果

| 試料 | bw(tr) | bw(pb) | bw(br) | md | pm | その他 | 合計 |
|----|--------|--------|--------|----|----|-----|-----|
| 2 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 249 | 250 |
| 4 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 250 | 250 |
| 6 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 250 | 250 |
| 8 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 249 | 250 |
| 10 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 249 | 250 |
| 12 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 250 | 250 |
| 14 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 250 | 250 |
| 16 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 250 | 250 |

数字は粒子数。bw:バブル型, md:中間型, pm:軽石型。

tr:透明, pb:淡褐色, br:褐色。

第4表 東原ノ坪遺跡B地点の火山ガラス比分析結果

| 試料 | bw(tr) | bw(pb) | bw(br) | md | pm | その他 | 合計 |
|----|--------|--------|--------|----|----|-----|-----|
| 1 | 1 | 0 | 0 | 11 | 8 | 230 | 250 |
| 3 | 0 | 0 | 0 | 19 | 18 | 213 | 250 |
| 5 | 1 | 0 | 0 | 9 | 9 | 231 | 250 |
| 7 | 0 | 0 | 0 | 4 | 0 | 246 | 250 |
| 9 | 0 | 0 | 0 | 2 | 1 | 247 | 250 |
| 11 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 249 | 250 |
| 13 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 248 | 250 |
| 15 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | 248 | 250 |
| 17 | 1 | 0 | 0 | 2 | 0 | 248 | 250 |
| 19 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 250 | 250 |
| 21 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 249 | 250 |

数字は粒子数。bw:バブル型, md:中間型, pm:軽石型。

tr:透明, pb:淡褐色, br:褐色。

512にあり、2種類の火山ガラスが混在しているものと考えられる。前者はAT、後者は約6,300年前に南九州地方の鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah, 町田・新井, 1978)に各々由来すると考えられる。

以上のことから、VI層上半部にATの、またIII—1層中にK-Ahの各々の降灰層準があると考えられる。

6. まとめ

東原ノ坪遺跡において、土層の堆積年代に関する資料を収集するために、地質調査、火山ガラス比分析、テフラ検出分析さらに屈折率測定を合わせて行った。その結果、下位より、始良Tn火山灰(AT, 約2.2—2.5万年前)、鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah, 約6,300年前)、天城カワゴ平軽石(Kg, 約2,800—2,900年前)の3層のテフラの降灰層準を検出すことができた。

第5表 東原ノ坪遺跡C地点のテフラ検出分析結果

| 試料 | 軽石 | | | スコリア | | |
|----|----|----|-----|------|----|-----|
| | 量 | 色調 | 最大径 | 量 | 色調 | 最大径 |
| 2 | ++ | 白 | 1.1 | - | - | - |
| 4 | + | 白 | 1.2 | - | - | - |
| 6 | ++ | 白 | 1.1 | - | - | - |
| 8 | ++ | 白 | 1.1 | - | - | - |
| 10 | + | 白 | 1.0 | + | 黒 | 1.1 |
| 12 | + | 白 | 1.0 | - | - | - |
| 14 | + | 白 | 1.1 | - | - | - |

++++：とくに多い, ++：多い, +：中程度

+：少ない, -：認められない。

第6表 東原ノ坪遺跡の屈折率測定結果

| 地点 | 試料 | 火山ガラス (n) |
|----|----|---------------------------------------|
| A | 10 | 1.499-1.501(1.500) |
| B | 13 | 1.499-1.512(1.499-1.501, 1.509-1.512) |
| B | 17 | 1.499-1.501 |

屈折率の測定は、位相差法（新井，1972）による。

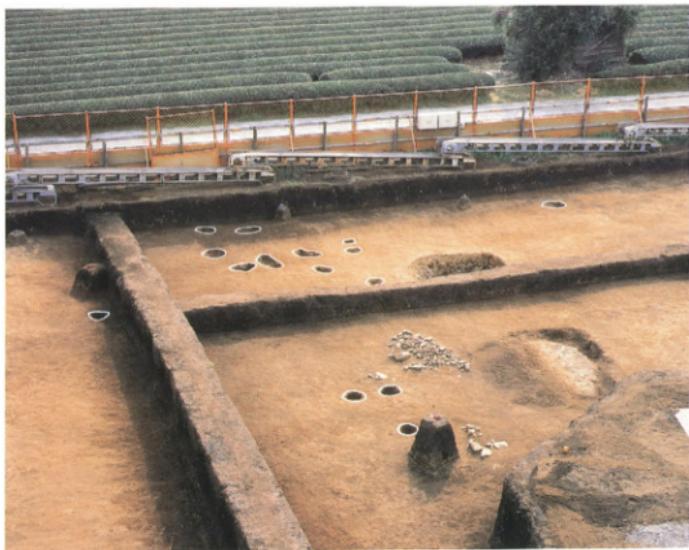
文献

- 新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石によるテフラの同定—テフロクロノロジーの基礎的研究。第四紀研究, 11, p.254-269.
- 町田 洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰—姶良Tn火山灰の発見とその意義—。科学, 46, p.339-347.
- 町田 洋・新井房夫 (1978) 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ—鬼界アホヤ火山灰。第四紀研究, 17, p.243-263.
- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス。東京大学出版会, 276 p.

図 版



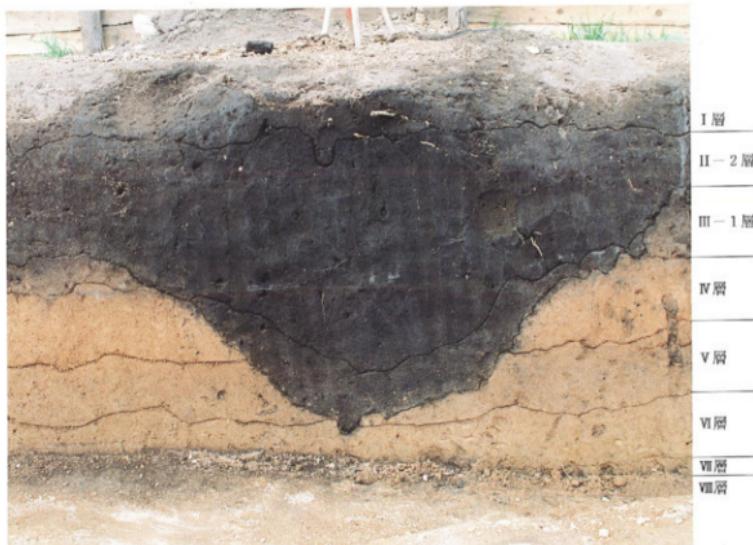
1. IV層上面全景（北東より）



2. IV層上面検出遺構（北西より）



1. 北法面土層堆積状況（第5-1図a地点付近）



2. 北法面SD 21 横断面



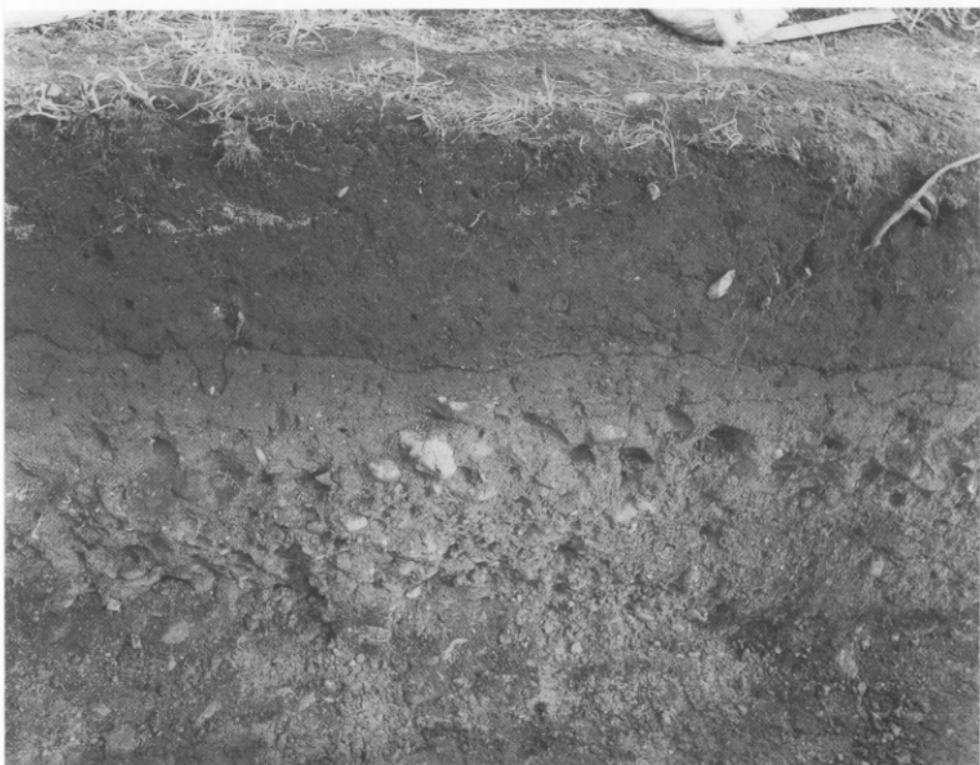
I. IV層上面検出遺構（西より）



2. 西法面土層堆積状況（第5-I図d地点付近）とSP 41横断面



1. 浅礫部横断面（東法面南部）



2. 浅礫部横断面近景（東法面南部）

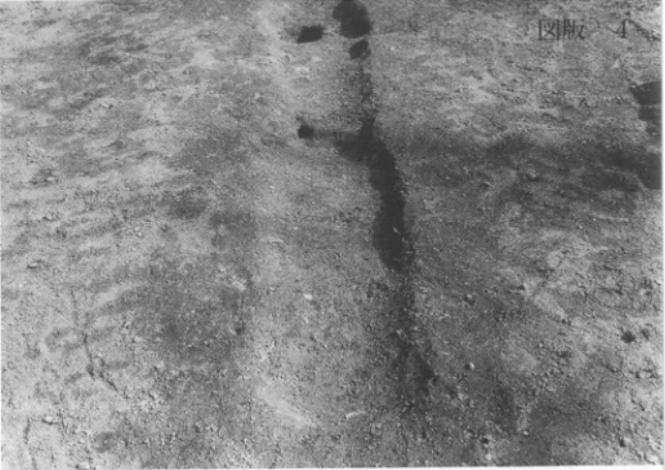


1. SD 21・配石SX 42(北東より)



2. SD 21 内土器片P 08 出土状况

1. SD 08・SP 03
(北西より)

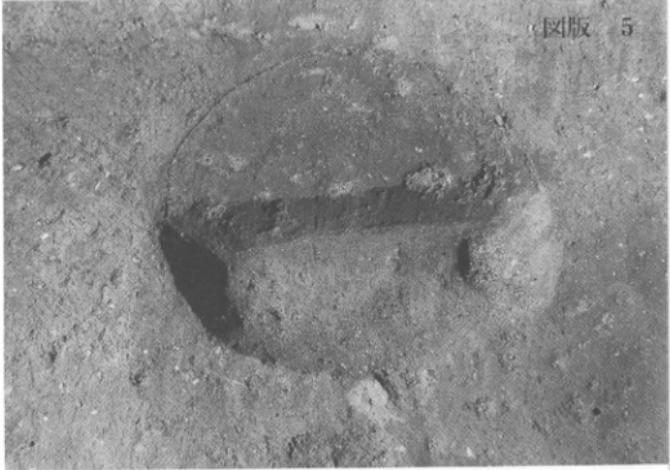


2. SP 15 検出状況



3. SP 04~06
半裁状況





1. SP 33 半掘状況



2. SP 33 完掘状況



3. SP 39・40 横断面



1. 配石SX 42



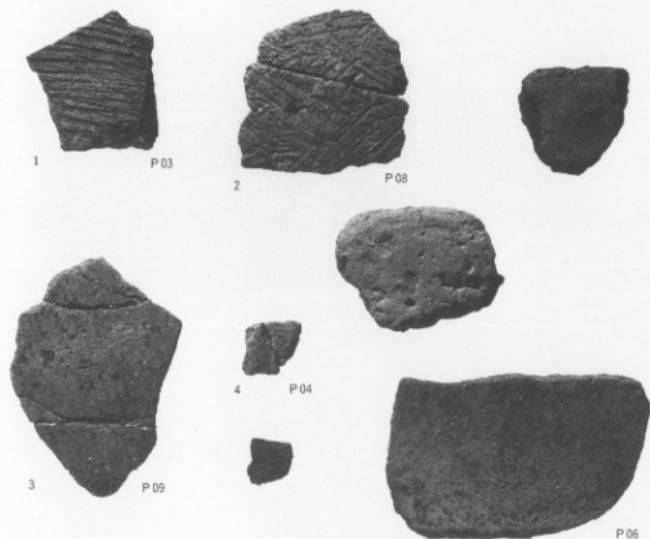
2. 集石SX 43



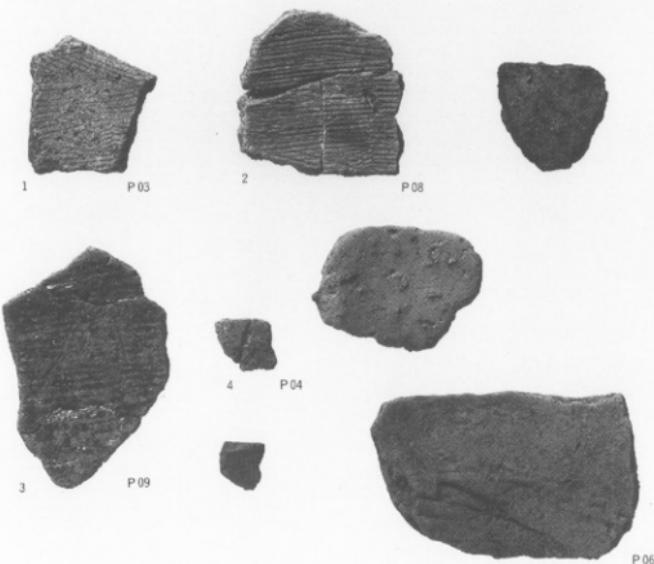
1. 集石SX 44（西より）



2. 集石SX 44 解体状況



I. SD 21 出土土器片（外面）



2. SD 21 出土土器片（内面）

報告書抄録

| | | | | | | | |
|--------|-------------------------------------|--|--|--|--|--|--|
| ふりがな | ひがしらのつぽいせき | | | | | | |
| 書名 | 東原ノ坪遺跡 | | | | | | |
| 副書名 | 平成7年度静岡県立大学教職員住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 | | | | | | |
| シリーズ名 | 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第86集 | | | | | | |
| 編著者名 | 小澤敦夫・落合高志 | | | | | | |
| 編集機関 | 財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所 | | | | | | |
| 所在地 | 〒422 静岡県静岡市谷田23-20 TEL 054-262-4261 | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦1997年3月31日 | | | | | | |

| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 °°°' | 東経 °°°' | 調査期間 | 調査面積 m ² | 調査原因 |
|--------------------|--------------------------------------|-------------------|-------------------------------|-------------------|--------------------|---------------------------|---|---------------|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| ひがしらのつぼいせき 東原ノ坪 | しづかにんしづおかし 静岡県静岡市 くによしだ 国吉田 | 22201 | | 34度 59分 15秒 | 138度 26分 34秒 | 19951201 ↓ 19960331 | 延2,000m ² | 住宅建設工事に伴う事前調査 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | | 主な遺物 | | 特記事項 | |
| 東原ノ坪 | 集落 | 弥生後期 ↓ 古墳前期 | 溝 掘立柱建物跡 小穴 集石 配石 | | 弥生土器 土師器 | | 火山灰分析を実施し、下位より始良Tn火山灰、鬼界アカホヤ火山灰、天城カワゴ平軽石の降灰層準を検出。 | |

静岡県埋蔵文化財発掘調査報告書 第 86 集

東原ノ坪遺跡

平成 7 年度静岡県立大学教職員住宅建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1997 年 3 月 31 日

編集発行 財団法人
静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒 422 静岡市谷田 23 番 20 号
TEL (054)262-4261 ㈹
FAX (054)262-4266

印刷所 黒船印刷株式会社
静岡市登呂二丁目 4 番 25 号
TEL (054)286-0236 ㈹